

グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

—魔法からの解放結婚について—

Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über die Heirat zur Dankbarkeit für die Erlösung der Verwünschung

太田伸広

要旨：魔法からの解放結婚とは、魔法をかけられた人が魔法を解いてくれた人と結ぶ結婚である。魔法からの解放結婚の最大の特徴は、親が家父長的な態度をとらないことである。これは、よく似た難題解決結婚（地上の人間には解決不可能なような難題をやり遂げてお姫様などをもらう結婚）のメルヘンに登場する親が例外なく家父長的であるのと対照的である。その理由は、魔法を解くということが、魔女や魔法使いに対する神の勝利を意味するが故に、家父ですら、魔法からの解放という行為には、口出できない、否存在そのものが不要だからであろう。同じ理由で、魔法からの解放結婚には、親の許可のみならず、愛情もいらない。次に、魔法から解放される者は、すべてお姫様（9例）か王子（4例）である。魔法から解放されて結婚する者は、魔法からの解放という偉大な行為には、最も高貴な身分を差し出し、相手をお后様や王様にして報いる以外に相応しい振舞いが無いからであろう。『日本の昔ばなし』には魔法からの解放結婚は1話もない。

はじめに

グリム童話と『日本の昔ばなし』を「魔法からの解放結婚」に焦点を当てて比較する。分析の対象は、グリム童話の場合は、1857年の決定版のKHM 200篇、203話で、日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話である。

結婚は、その種類と類型の両面から分析することにする。種類とは、恋愛結婚、難題解決結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚、等々である。類型であるが、異なる結婚、例えば、恋愛結婚と難題解決結婚であっても、王家（殿様家）の男と王家（殿様家）の女の結婚ということでは同じ型の結婚であり、それを結婚の類型と呼ぶことにする。王家（殿様家、高貴な身分）の男と王家（殿様家、高貴な身分）の女の結婚を「類型1」、王家（殿様家）の男と庶民の女の結婚を「類型2」、庶民の男と王家（殿様家）の女の結婚を「類型3」、庶民同士の結婚を「類型4」とする。

魔法からの解放結婚とは、魔法にかけられたり、呪われたりして苦境に陥った者が、魔法を解いて解放してくれた人と取り結ぶ結婚のことである。

グリム童話には、そのような魔法からの解放結婚は全部で13篇15組あり、21篇、23組の恋愛結婚に次いで多い結婚の種類である。類型1が5篇、7組、類型2が2篇、類型3が6編である。『日本の昔ばなし』には、魔法からの解放結婚はまったくない。

これから、グリム童話の魔法からの解放結婚を「類型」別に具体的にみていくことにする。

グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder- und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999 である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』（岩波書店）である。

第1章 グリム童話の魔法からの解放結婚

第1節 類型1の魔法からの解放結婚

最初は『蜜蜂の女王（Bienenkönig）』（KHM 62）である。

むかし昔三人の王子があった。三人が旅をしている途中、兄二人は蟻塚（Ameisenhaufen）を見つけて、掘り返そう（aufwühlen）とした。末の馬鹿太郎（Dummling）は兄さんたちに止めるように言った。先に進むと、湖で鴨がたくさん泳いでいた。兄二人は鴨（Enten）を捕まえて焼き鳥にしようとした。馬鹿太郎はまた反対した。今度は蜜蜂の巣（Bienenest）のあるところを通りかかった時、兄二人が蜜蜂を窒息死させ、蜜を取ろうとした。馬鹿太郎はまた兄たちに反対し、その行為を止めさせた。

それから三人はあるお城へやって来た。中へ入ると、石の馬があるだけで、人の気配はなかった。ところが、一番奥の部屋に灰色の小人（ein graues Männchen）がいた。大声で叫ぶと、小人は鍵を開けて出てきた。小人は一言もしゃべらず、三人をご馳走が一杯並んだ食卓へ案内した。翌朝小人は石の板のところへ案内した。板には、お城の魔法を解くための課題が三つ書かれていた。（darauf standen drei Aufgaben geschrieben, wodurch das Schloß erlöst werden könnte.）一つは、森の中の苔の下にある千粒のお姫様の真珠を日没までにすべて探し出すことであった。失敗すれば石になるということだった。二つ目の課題は、お姫様の寝室の鍵を海の中から取ってくることであった。三つ目の課題は、眠っている三人のお姫様の中から一番下の最も愛されているお姫様（die jüngste und die liebste）を探し出すことであった。三人はそっくりで、長女が砂糖を、次女がシロップ（糖蜜）を、末のお姫様が蜂蜜を食べて寝たという以外に三人を区別する方法はなかった。

一番上の王子は百粒しか見つけられず、石になってしまった。（er ward in Stein verwandelt.）次男も二百粒以上見つけられず、石になった。末の王子の馬鹿太郎も仕事はかどらず、石の上に座って泣いていた。すると、蟻の王様（der Ameisenkönig）が五千匹の家来の蟻をつれてやって来て、真珠を全部拾い集めてくれた。それから、馬鹿太郎が海へ行くと、鴨が海の底から鍵を取ってきてくれた。最後の課題はというと、蜜蜂の女王（die Bienenkönigin）が蜂蜜を食べたお姫様の口に止まって動かなかったので、馬鹿太郎はすぐにそれが末のお姫様であることがわかった。これで魔法が解けた。（Da war der Zauber vorbei,）そして馬鹿太郎は、末のお姫様と結婚し、父王が亡くなられた後、王様になった。兄二人の王子も姉のお姫様たちを妻にもらった。

このように、馬鹿太郎は、魔法をかけられ、石にされていたり、眠らされていた人々を救い、末のお姫様と結婚したのであるから、二人の結婚は典型的な魔法からの解放結婚である。

このメルヘンで、魔法を解く、つまりお城を魔法から救い出すには、命を賭けて、三つの難題をやり遂げなければならない。これらの難題をやり遂げてお姫様をもらう点では、難題解決結婚と同じである。また、難題を解決するにあたり、異次元の世界からの動物が主人公を助け

たり、主人公に代わって難題を解決する点も同じである。しかし、難題を解決することは、魔法からの解放結婚には必要な場合もあるが、魔法を解くことは、難題解決結婚には必要なく、その一部にはなりえない。それが両者の根本的な違いである。

この魔法からの解放結婚では、魔法を解く人は、王子で、男性である。魔法から解放されて救われるのは、お姫様で、女性である。

この『蜜蜂の女王』には、王様もお后様も登場しない。王様については、末のお姫様の父上の亡くなられた後 (nach ihres Vaters Tod) という叙述があるだけである。しかも、王様としてでなく、お姫様の父としてしか描かれていない。主体はあくまでお姫様である。

しかし、そのお姫様も、このメルヘンでは、性格を持った主体的な人物としては登場していない。単にお姫様の叙述があるだけである。しかも、その叙述は「馬鹿太郎が一番下の最も愛されているお姫様と結婚しました、そして彼女の父上の亡くなられた後、王様になりました。Und der Dummling vermählte sich mit der jüngsten und liebsten, und ward König nach ihres Vaters Tod;」となっており、お姫様は、あくまで馬鹿太郎の付属品であり、主人公は明らかに馬鹿太郎である。したがって、当然のことながら、自分を魔法から解放し、救ってくれた王子をどう思っているのか、好きなのか嫌いなのか、結婚する意思があったのかなかったのか、一切分らない。全体として、馬鹿太郎と結婚した末のお姫様には、意思も感情も人格もなく、お姫様は、馬鹿太郎がお城を魔法から解いたことへの褒美の品という色彩が濃い。姉二人のお姫様については、さらに叙述が少なく、姉二人のお姫さまがいる、という程度にしか分らない。

最後の最後に、誰と誰か分らないが、兄の王子二人と姉のお姫様二人も結婚する。もちろん何のために、なぜ結婚したのかまったく分らない。

第2番目は『三羽の小鳥 (De drei Vügelkens)』(KHM 96) である。

千年以上も前のこと、ある王様が狩りに出かけた。すると、雌牛 (ire Köge) の番をしていた3人の娘 (drei Mäkens) の内、長女が王様を、次女と三女が大臣 (Minister) をお婿さんに欲しいと言った。王様たちも娘が気に入ったのか、王様と長女、大臣と次女、大臣と三女が結婚した。

王様が旅に出ている時に、お后様は男の子をもうけた。しかし、子供のできなかった妹二人は、男の子を川の中へ放り込み、王様にはお后様が犬の子を産んだと言った。捨てられた男の子は、運良く漁師に川から拾われ育てられた。次の男の子も妹二人は川に捨て、王様にはお后様が犬の子を産んだと言った。次の女の子も妹二人は川に捨て、王様にはお后様が猫の子を産んだと言った。川に捨てるたびに、小鳥 ('n Vügelken) が空高く舞い上がった。神様のなさることはそれでよいと言って、我慢してきた王様も最後 (三度目) には堪忍袋の緒が切れ、お后様を牢屋へ放り込んだ。

長男も次男も父親を探しに旅に出た。しかし、父親は見つからなかった。最後に娘が出かけた。娘が川の側に来ると、老婆 (de ole ru) がいて、娘に鞭 ('n Roe) を渡し、まっすぐ行くと、お城 (dat Schlott) に行き着く、そのお城を突き抜けると、古い井戸 ('n olen Brunnen) があり、その木に鳥が一羽入った鳥かご ('n Vugel im Buer) が掛けてある、その鳥かごと井戸の水 ('n Glas Water) をコップに汲んで持って帰ちなさい、そして黒い犬 (einen groten swarten Hund) の顔を鞭で叩いて、私のところへ戻っておいで、と言った。すべて老婆の言ったとおりであった。帰り道で、兄さん二人にも出会った。それから大きな黒い犬の顔を鞭で殴ると、犬は美しい王子 ('n schönen Prinz) になった。そして四人で川岸に来ると、老婆は大変喜

んで、川を渡してくれ、どこかに姿を消した。老婆も魔法が解けたのである。(se was nu erlöst.)

四人は、育ての親の漁師のところへ帰って行った。ある時、狩に出た王様が狩をしていた次男に会い、次男にどこの者か尋ねた。次男が漁師の息子ですと答えると、王様はあの漁師に子供はおらんと言ひ、不思議に思って、漁師の家に行った。すると、壁に掛けていた鳥かごの鳥が歌を歌ひ、妹たちの犯罪が明るみに出た。王様は、お城に帰り、お后様を牢屋から出してやった。お后様は衰弱していたが、井戸の水を飲むと元気になった。妹二人は焼き殺された(verbrennt)。そして娘は王子と結婚した。(, un de Tochter friggede den Prinzen.)

王様と大臣二人と娘三人の結婚は、恋愛結婚であるので、ここでは取り上げない。ここで問題となるのは、王様の三番目の子であるお姫様と王子の結婚である。王子は大きな黒い犬であったが、お姫様が老婆の教えのとおり、その犬の顔を鞭で叩くと、人間の姿になった。お姫様は王子の魔法を解き、結婚をしたのであるから、二人の結婚は、魔法からの解放結婚である。

このメルヘンでは、魔法を解く人はお姫様で、女性であり、魔法から救われるのは黒い犬の王子で、男性である。魔法を解くのに、異次元の世界からの贈物の鞭が決定的な役割を演ずる。

このメルヘンに登場する王様は、賢明さに欠けるところはあるが、家父長的なところはない。

このメルヘンでは魔法を解くお姫様が主役となっている。お姫様には意志も感情もあり、積極的に行動する。逆に、魔法を解いてもらって、黒い犬から人間の姿に戻った王子には、意思も感情も人格も感じられない。お姫様との結婚に関してどう思っているかもまったく分らない。このメルヘンの王子は、次から次へと行動に打って出て、魔法を解くお姫様の活躍のご褒美でしかない。二人は結婚するが、結婚の動機は二人とも分らない。お姫様は王子の美しさに惹かれたのかも知れないし、王子は魔法から解放してもらったことが結婚に踏み切る動機だったのかも知れないが、はっきりとした叙述はない。

第3番目は『命の水 (Das Wasser des Lebens)』(KHM 97) である。

むかし昔、王様があった。王様は病気で助かる見込みはなかった。王様には三人の息子があった。王子たちが泣いていると、ある老人が命の水を飲めば王様は助かる、と教えてくれた。

一番上の王子は、王様の後を継ごうと思い、命の水を探しに出かけた。王子は、途中で出会った小人 (ein Zwerg) に「そんなに急いでどこに行くのですか」と尋ねられた時、小人を「頓馬なちび (Dummer Knirps)」と馬鹿にして、行ってしまった。怒った小人は、王子を呪った。(Das kleine Männchen...hatte einen bösen Wunsch getan.) 王子の行く道はだんだん狭くなり、馬に乗った王子は、後戻りできなくなって、峡谷 (Bergschlucht) に閉じ込められてしまった。二番目の王子も小人を馬鹿にしたため、同じような運命に会った。

最後に末っ子の王子が出かけて行った。小人に出会った王子は、小人に丁寧に対応した。すると小人は、「命の水は魔法をかけられている城の庭の泉から湧き出ています。Es quillt aus einem Brunnen in dem Hofe eines verwünschten Schlosses,」と教えてくれ、鉄の鞭と小さなパンの塊を二つくれた。鞭は門を開けるためのものであり、パンは門の内側にいるライオンを懐柔するためのものだった。王子がお城に着くと、すべて小人の言ったとおりであった。お城の中には魔法をかけられた王子たち (verwünschte Prinzen) がいた。王子は彼らの指から指輪を抜き取り、またそこにあった剣とパン (ein Schwert und ein Brot) も取った。お城の中をさらに進んでいくと、ある部屋に美しい乙女 (eine schöne Jungfrau) がいた。乙女 (王女 eine schöne Prinzessin) は王子を見ると喜んで、王子に口づけをし、あなたは私を救い出してくれました (er hätte sie erlöst)、私の国はすべてあなたにあげましよう、そして一年後に結婚式を

挙げましようと言い、命の水のありかも教えてくれた。

命の水を手に入れ、王子は岐路に着いた。途中またあの小人に出会った。小人は剣とパンを見ると、それは宝物で、その剣があれば敵をすべて打ち破ることができるし、そのパンはいくら食べても無くならないパンです、と教えてくれた。王子は小人に頼んで、消息がわからなくなった兄の王子たちも助けてもらい、三人一緒に国へ帰って行った。国へ帰る途中、末の王子は飢餓と戦争があった国を剣とパンで救ってあげた。それから、同じように飢餓と戦争のあった国をもう二つ救ってあげた。

海を渡って帰る途中、兄二人は弟が寝ている隙に、命の水を奪い、弟の杯には海水を入れておいた。

三人がお城に着くと、弟は王様に命の水を飲ませた。すると、具合が一層悪くなった。そこへ兄二人が出て来て、王様に、弟は父上を毒殺しようとしたのですと言い、王様に命の水を飲ませて、王様の元気を取り戻させた。そこで、王様は末の息子を密かに殺すように狩人に命じた。そうこうするうち、黄金と宝石を積んだ車が三台やって来て、末の王子にお礼として差し上げますと言った。それを見て、王様は息子を殺させたことを後悔し始めた。しかし狩人が、実は殺していないのです、と本当のことを話したので、王様は安心した。

末の王子に救われた王女（Die Königstochter）は、お城の前の道を黄金で造らせ、道の真ん中を通ってくる者だけをお城に入れるように命じておいた。兄二人は、王女と国をもらおうと思って、出かけていったが、黄金の道を馬で通るのはもったいないと思って、端を通って行った。それで、追い返された。末の王子は、いつも最愛の王女のことばかり考え、早く王女の所に行きたいと思っていたために、黄金の道がまったく目に入らず、真ん中を通って行った。王女は「あなたこそ私を救い出してくださいだったお方で（er war ihr Erlöser）、この王国の支配者です。」と言って、喜んで王子を迎えた。それから結婚式がとり行われた。兄二人はどこかへ行き、二度と姿を現さなかった。

以上で明らかなように、末の王子と王女との結婚は、紛れもなく、魔法からの解放結婚である。魔法を解いたのは王子で、男性であり、魔法から救い出されたのは王女で、女性である。ただし、叙述を見る限り、王女が魔法にかけられているようには見えない。少なくともどのような魔法にかけられているのか、わからない。

魔法を解く上で、異次元の世界の小人の情報と知識、その小人からの贈物である鉄の鞭とパンが決定的な役割を演ずる。また、異次元の世界からの別の贈物、剣とパンも主人公の末の王子を難局から救う。このメルヘンに登場する王様には家父長的なところはない。

『命の水』の主人公は、魔法を解いた末の王子であるが、魔法から解放され、王子と結婚した王女も、王子と比べれば比重は軽いが、もう一人の主人公である。王子も王女も意志も感情もはっきりしており、行動的、積極的である。王子の方では、魔法をかけられたお城の魔法を解き、王女を救い出したそのお礼として、王女をもらおうという意識はないし、そういう意図もなかった。王子の目的は、父の王様の難病を治すことのできる命の水を取ってくることだけだったからである。その証拠に、王女を魔法から解放し、お城から出て、父王のいるお城へ帰る途中、命の水を手に入れたことは喜んでいるが、王女から結婚の話を持ち出されたことを喜んでいるような描写はない。しかし、後に王子の心には、理由はわからないが、激しい愛の感情が生まれる。「森から出て最愛の王女の所へ行き、王女の側で苦しみを忘れようと思った。

, wollte der dritte aus dem Wald fort zu seiner Liebsten reiten und bei ihr sein Leid vergessen.」

とか「いつも王女のことばかり考え、早く王女ところに行きたくてたまらなかった er...dachte immer an sie und wäre gerne schon bei ihr gewesen,」という叙述にそれがよく表れている。これは熱い恋愛感情で、明らかに王女を救い出した時の反応とは違う。王女はというと、救い出された時、喜んで王子に口づけをし、一年後の結婚を誓う。しかし、この時の喜びは、救い出されたことへの喜びであり、結婚相手を見つけた喜びとか、恋愛感情はほとんどないといっているであろう。しかし、一年後、冷静に客観的に考えられる立場にあったが王女が、本当のお嬢さんに、自分への愛情が本当にあるかどうかを試す方法まで考え出して、実行に移し、本当のお嬢さんの姿を見ると、喜んで迎えたのであるから、最後は王女は王子に好感を持っていたと判断してよいであろう。したがって、『命の水』の魔法からの解放結婚は同時に恋愛結婚ともなっている。しかし、王女は「あなたは私を救い出してくれました」と言ってすぐ結婚を約束していること、結婚相手の王子を自分の Erlöser と言っていること、またたとえ愛情が芽生えていたとしても、それは魔法から解放された後のことであることからして、また、王子に恋愛感情が生じたのも解放後のことであることからして、魔法からの解放結婚の枠組みはまったく崩れていない。それゆえ、二人の結婚は魔法からの解放結婚である。恋愛結婚に分類することはできない。

第4番目は『怖いもの知らずの王子 (Der Königssohn, der sich vor nichts fürchtet)』(KHM 121)である。

むかし昔、王子があった。王子は怖いもの知らずで、広い世界へ冒険の旅に出た。王子はどこまでも歩いて行き、巨人 (ein Riese) の家の前にやって来た。巨人は王子が力強いを見て、わしの婚約者のために命の木のりんご (einen Apfel vom Baum des Lebens) を取ってきてくれ、と頼んだ。

そこで、王子はそれを探しに行った。山や谷を超え、野原や森をいくつも通り抜け、やっと命の木がある不思議な庭 (den Wundergarten) を見つけた。それから、命の木に登り、赤いりんごの前にぶら下がっている輪に手を突っ込み、りんごをもぎ取ると、輪が締まった。門から出ようとする、大きな音がして、寝ていたライオンが目を覚ました。しかし、ライオンは王子を主人として仰ぎ、おとなしくついてきた。

王子がりんごを巨人に渡すと、巨人はこれでもうすぐ結婚できると思って喜び、急いでそれを婚約者のところへ持っていった。しかし、美しく賢い乙女 (eine schöne und kluge Jungfrau) は、巨人の腕に輪がないのを見ると、あなたが取ってきたのではない、と言った。そこで、巨人は王子から輪を腕ずくで取ろうとしたが、輪の魔力 (die Zauberkraft des Ringes) で強くなった王子にはかなわなかった。そこで、巨人は王子をだまして腕輪を盗み、逃げていった。ところが、主人に忠実なライオンが巨人を追いかけ、輪を取り返した。すると、巨人は背後から王子を襲い、王子の目を二つともくりぬき、目が見えなくなった王子を崖から突き落とそうとした。しかし、それに気づいたライオンが巨人を突き落とし、王子を救った。それからライオンは王子を澄んだ小川に連れて行き、王子の顔に水をかけた。すると、王子の目は少し見えるようになった。王子は今度は自分で小川の水で顔を洗った。すると、まったく目が見えるようになった。

王子は神様の慈悲に感謝し、ライオンを連れてまた冒険の旅を続けた。そしてある魔法をかけられているお城 (ein Schloß..., welches verwünscht war) の前にやって来た。すると、門の前に立っていた、色が真っ黒な、美しい姿をした上品な顔つきの乙女 (eine Jungfrau von schöner Gestalt und feinem Antlitz, aber sie war ganz schwarz.) が「私にかけられたひどい魔

法から私を救っていただけませんか。ach könntest du mich erlösen aus dem bösen Zauber, der über mich geworfen ist.」と言った。魔法を解くには、魔法をかけられているお城の大広間で三晩過ごさなければならない (drei Nächte mußt du in dem großen Saal des verwünschten Schlosses zubringen,) ということだった。王子は神助も期待して、それを引き受けた。

真夜中になると、小さな悪魔 (kleine Teufel) がたくさん出てきた。そして彼らは王子を床の上で引きずりまわしたり、つねったり、突き刺したり、なぐったり、苦しめたりした。しかし、王子は一言もしゃべらず、声すら出さなかった。(Sie zerrten ihn auf dem Boden herum, zwickten, stachen, schlugen und quälten ihn, aber er gab keinen Laut von sich.) 朝方悪魔たちは消え失せた。王子は痛めつけられて手足を動かすことができなかったけれども、黒い乙女が命の水を持ってきて、王子の体を洗うと、何の痛みもなくなり、また元気になった。この時、乙女の足が白くなっていた。次の晩も王子が悪魔たちの攻めにじっと耐え抜くと、乙女は指先まで白くなっていた。三日目の晩は、悪魔たちの攻めは最もひどく、王子は気を失った。しかし、音をあげなかった。しばらくして意識が戻り、目を開けると、雪のように白く、晴れ渡った昼のように美しい (die war schneeweiß und schön wie der helle Tag.) 乙女がそばに立っていた。乙女は「階段の上へ剣を三度振って下さいませ、それですべての魔法が解けるのです。schwing dein Schwert dreimal über die Treppe, so ist alles erlöst.」と言った。王子がそうすると、お城全体が魔法から解放された。(da war das ganze Schloß vom Zauber befreit.) 乙女はお金持ちの王女だった。そして王子と王女の結婚式がとり行われた。

このメルヘン全体が怖いもの知らずの王子の冒険の話であり、前半の巨人と王子の戦いもその冒険の一つであるが、結婚とは何の関係もないので、今は考察の対象とはしない。後半は、王子がお城全体を魔法から解放するために試練に堪え、解放した王女と結婚する、紛れもない魔法からの解放結婚の話である。

魔法を解くのに、異次元の世界の登場人物 (ライオン) も贈物 (命の水) も何の働きもしない。命の水は大きな働きをしているように思われるが、痛めつけられた体の回復に役立つだけで、魔法を解く上では力を発揮していない。悪魔も激しい折檻をしたものの、もともと命を取る気はなかった。(das Leben dürften sie dir nicht nehmen.)

このメルヘンでは、父の王様も母のお后様も登場しない。父の家 (seines Vaters Haus) とか両親に別れを告げた (Also nahm er von seinen Eltern Abschied) という表現があるだけで、人物は登場しない。そればかりか、王様やお后様は、王子と王女の結婚式にさえ出席した様子はない。

王子がお城の魔法を解いて王女を救い出したのは、王女と結婚するためではなかった。もともと平凡な生活に飽き、冒険の旅に出た王子のことである。すべて怖いもの知らずの王子の冒険心から出たものであった。その冒険の結果が王女との結婚である。そのためあってもか、王子が王女をどう思っているのかははっきりしない。王女について「雪のように白く、晴れ渡った昼のように美しい」という、人を魅了する最大限の形容があり、それが王子の心を捉えたかのように表現しようとしていることはわかるが、読者には必ずしもそうは読めない。それほどまでに美しい王女なのに、王子の反応がまったくないからである。そして何の反応もないまま、結婚へといたる。王女の方も王子をどう思っているのか、よくわからない。

第5番目は『鉄のストーブ (Der Eisenofen)』(KHM 127) である。

むかし昔、ある王子が年老いた魔女に魔法をかけられ (von einer alten Hexe verwünscht)、

森の中の大きなストーブの中に (in einem großen Eisenofen) 閉じ込められた。

ある時、お姫様が森に迷い、この鉄の檻の前に (vor dem eisernen Kasten) やって来た。檻は、森から出る道を教えてあげるから、私と結婚する約束をして、私を救い出してください、と言った。お姫様は鉄のストーブ（檻）と結婚することに当惑したが、家に帰りたいので約束に応じた。

お城に帰ったお姫様は、父上のところに帰りたい一心で、「再び鉄のストーブの所に行き、彼を救い出し、彼と結婚します、と彼に約束せざるをえなかったの。’, dem [dem eisernen Ofen] habe ich mich müssen dafür unterschreiben, daß ich wollte wieder zu ihm zurückkehren, ihn erlösen und heiraten.」と父王に言った。これを聞いた父王は大変驚き、一人娘を失うまいと、相談して、粉屋の娘 (die Müllerstochter) を派遣した。しかし、鉄のストーブが「昼のような気がする」と言ったのに対し、娘が「私もそんな気がします。お父さんの水車が回るガタガタという音が聞こえるみたい」と答えたので、粉屋の娘であることがばれてしまった。ストーブは、お姫様を連れてきなさいと言い、粉屋の娘を追い返した。そこで王様とお姫様は、今度は豚飼の娘をやった。豚飼の娘も角笛のことを口に出し、身分がばれた。鉄のストーブは、豚飼の娘に、お姫様が来ないと国全体が滅びることになる、と伝えるように言った。

これを聞くと、お姫様は泣き出した。しかし、今度こそはどうしようもなく、短刀を持って森へ出かけて行った。そしてお姫様は短刀でストーブを二時間削った。すると、小さな穴が開いた。中に、金や宝石 (Gold und Edelsteinen) で飾った非常に美しい青年 (einen so schönen Jüngling) が見えたので、お姫様はすっかり気に入ってしまった (daß er ihr recht in der Seele gefiel)。お姫様は必死になってストーブを短刀で削った。そして人が出てこられるほどの大きさまでストーブを削り、青年を救い出した。青年は「あなたは私のもの、そして私はあなたのもの。あなたが私の花嫁です。私を救い出してくれたのはあなたです。Du bist mein und ich bin dein, du bist meine Braut und hast mich erlöst.」と言った。

王子はお姫様を自分の国へ連れて行こうとしたが、お姫様はもう一度父王に会わせて欲しいと言った。王子は、帰ってもいいが、三言以上父王と話をしてはいけない、と釘を刺した。しかし、お姫様が父王とたくさん話をしたので、王子はどこか遠くの方に消え失せた。お姫様は森へ引き返し、王子を探した。しかし無駄であった。遠くに灯りが見えたので、行くと、小さな古い家があった。お姫様が戸を叩くと、小さなひき蛙 (eine kleine Itsche) が戸を開けてくれた。そしてひき蛙たちはお姫様を歓迎した。お姫様が身の上話をすると、年老いた太ったひき蛙は小さなひき蛙に箱 (die Schachtel) を持ってこさせた。そしてお姫様に大きな針三本 (drei große Nadeln) と鋤の車 (ein Pflugrad) と胡桃三つ (drei Nüsse) を与えた。

お姫様はこの三品を持って旅に出た。つるつる滑るガラスの山 (den gläsernen Berg..., der so glatt war,) は、三本の針を交互に刺して超えた。三本の鋭利な剣 (die drei schneidenden Schwerter) は鋤の車に乗って通って行った。最後に大きな川を渡り、鉄のストーブから救ってあげたあの王子のいる大きな美しいお城に入って行った。そして料理女 (Küchenmädchen) として雇ってもらった。しかし、王子は昔のお姫様は亡くなったものと思い、別の女性と結婚しようとしていた。お姫様が胡桃を食べようとして割ると、中から立派な王家の衣装 (ein stolzes königliches Kleid) が出てきた。花嫁様はこれを見て大変欲しがった。そこで、お姫様は、花婿様の部屋で一晩休ませてもらう (eine Nacht in der Kammer ihres Bräutigams zu schlafen) という条件で、花嫁様に衣装を差し上げた。そしてお姫様は泣きながら王子に一所

懸命鉄のストーブのことを話したが、無駄であった。王子は花嫁様から眠り薬 (einen Schlaftrunk) の入ったぶどう酒を飲まされていたからである。二つ目の胡桃にはもっと美しい衣装が入っていた。同じ条件でその衣装を花嫁様に差し上げ、夜王子にこれまでのいきさつを話したが、やはり眠り薬を飲まされていた王子には何の効き目もなかった。三つ目にはもっと美しい純金の衣装が入っていた。それを花嫁様に差し上げ、もう一度王子の部屋で休むことを許してもらった。仕えの者たち (Die Bedienten) から話を聞いていた王子は、この晩は用心して眠り薬を飲まなかった。そして夜お姫様が泣きながら鉄のストーブの話をする、王子は飛び起きて、「お前が本当の花嫁だ。お前は私のもの、私はお前のもの du bist die rechte, du bist mein, und ich bin dein.」と言って、お姫様を連れて大きな川を渡り、三本の剣を通り、ガラスの山を越えて、ひき蛙のいた古い小さな家に行った。彼らが家に入ると、それは大きな城に変わった。そしてひき蛙たちの魔法も解けた。それらは王様の子供たちであった。それから結婚式が挙げられた。そして二人は仲のよい結婚生活を送りました。(sie...lebten in gutem Ehestand.)

お姫様が、魔女に魔法をかけられ鉄のストーブに閉じ込められていた王子を救い出して結婚したのであるから、二人の結婚は典型的な魔法からの解放結婚である。このメルヘンでは、王子を救い出すのに、異次元の世界からの贈物は必要ない。短刀で鉄のストーブを削るだけでよかった。その短刀は普通の短刀で、異界からの贈物ではない。ところが、遙かかなたの王子のいるお城へ行くのに、異界からの贈物、大きな針三本と鋤の車が必要であり、偽の花嫁 (der falschen Braut) から王子を奪い返すのに、同じく異界からの贈物である三つの胡桃が必要であった。つまり、王子を鉄のストーブから救い出し、結婚の約束をするまでは、異界からの贈物は必要ないが、王子を見つけ出し、結婚へとたどり着く上では、異界からの贈物が大きな役割を演ずる。

お姫様の父親である王様は、したことと言えば、一人娘の身代わりを森へ派遣しただけで、まったくの脇役である。しかも、そうする場合、王様は娘のお姫様と相談しており、王様が単独で決定してはいない。王様には家父長的なところはかけらもない。母親のお后様はまったく登場しない。

お姫様は、鉄のストーブが王子であると知りつつも、彼と結婚することが嫌で嫌でたまらななかったが、王子が非常に美しい青年であることがわかったとたん、王子がすっかり気に入る。王子はというと、鉄のストーブから解放してもらうことを条件に、「あなたは王様の娘ですが、私はあなたよりももっと大きな国の王子です。でもあなたと結婚いたします。Ich bin ein größerer Königssohn als du eine Königstochter, und will dich heiraten.」と言う。王子は、救出前は明らかに結婚と救出を交換条件にしている。では救出後はどうであろうか。鉄のストーブから救出された時、王子は「あなたは私のもの、そして私はあなたのもの。あなたが私の花嫁です。私を救い出してくれたのはあなたです。」と言う。しかし、「あなたは私のもの、そして私はあなたのもの。」という愛情表現のこの言葉でさえ、この場面では、われわれを、王子がお姫様に惚れ込んだという判断には導かない。「私を救い出してくれたのはあなたです。」という言葉の方が重い。つまり、王子の心を支配しているのは、愛情というよりも感謝の気持ちである。メルヘンの最後で、王子は「お前は私のもの、私はお前のもの」というように、解放された時と同じ表現を使い、偽の花嫁を置き去りにして、お姫様と結婚するが、この場合も、王子に好意もあるかもしれないが、「お前が本当の花嫁だ。」と言っているように、結婚の約束に、

あるいは約束そのものに忠実だったか、あるいは、命の恩人への感謝の気持ちはいつまでもなくしたりはしない、ましてや恩人を見捨てたりはしない、という王子の誠実な気持ちの方が強かったと思われる。

王子とお姫様の魔法からの解放結婚は、メルヘン全体の中で大きな地位を占めている。王子を鉄のストーブから解放して婚約し、さまざまな困難を乗り越えて結婚にまでこぎつけるというのが、このメルヘンの筋の後半であり、それがメルヘン全体の三分の二もあるからである。

第2節 類型2の魔法からの解放結婚

最初は『森の中の老婆 (Die Alte im Wald)』(KHM 123)である。

むかし昔、ある下女が主人にお供してある大きな森を通っていた。ところが、強盗たちに襲われ、みんな殺されてしまい、下女一人が生き残った。下女は森から抜け出せず、泣いていた。

すると、白い小鳩 (ein weiß Taubchen) が小さな金の鍵 (ein kleines goldenes Schlüsselchen) をくわえて一羽飛んできた。そしてこれは食べ物が入ったあちらの木を開ける鍵です、と言った。お陰で、下女は牛乳と白パン (Weißbrot) をおなか一杯食べることができた。それから、眠たくなると、また小鳩が飛んできて、寝台のある木を開ける鍵をくれた。木を開けると、小さな美しい柔らかな寝台 (ein schönes weiches Bettchen) があり、下女はそこでぐっすり寝た。翌朝、また小鳩が飛んできて、衣装の入った木を開ける鍵をくれた。木を開けると、お姫様でも持っていないような金と宝石で飾ったすばらしい衣装 (Kleider mit Gold und Edelsteinen besetzt, so herrlich, wie sie keine Königstochter hat) があった。

ある時小鳩がやって来て、老婆のいる小さな家の中から、飾りのない指輪 (einen schlichten Ring) を持ってきて欲しいと頼んだ。下女はさっそく小さな家に行った。そして老婆の持っていた鳥かごを奪うと、その鳥が飾りのない指輪をくわえていた。下女はそれを持って帰り、白い小鳩を待っていたが、小鳩は現れなかった。そこで、下女は木に寄りかかって小鳩を待つことにした。すると突然木の枝が彼女の体に巻きついた。それは二本の腕で、木は美しい男の人 (ein schöner Mann) になっていた。男の人は彼女を抱きしめ、心をこめて口づけをし、言った。「あなたは私を救い出し、老婆の魔力から解放してくれました。老婆は悪い魔女なのです。そして私を木にしていたのです。私は毎日二～三時間白い鳩になりました。そして老婆がああ指輪を持っている限り、私は人間の姿には戻れなかったのです。du hast mich erlöst und aus der Gewalt der Alten befreit, die eine böse Hexe ist. Sie hatte mich in einen Baum verwandelt, und alle Tage ein paar Stunden war ich eine weiße Taube, und solange sie den Ring besaß, konnte ich meine menschliche Gestalt nicht wiedererhalten.」男の人はある国の王子だった。そして王子と下女は王子の国へ行って結婚し、幸せに暮らした。(sie heirateten sich und lebten glücklich.)

以上で明らかのように、下女と王子の結婚は典型的な魔法からの解放結婚である。魔法の魔法を解き、木と鳩に変えられていた王子を救い出した下女は、魔法を解くのに、異次元の世界の登場人物の力もそこからの贈物の力も借りなかった。彼女は自分ひとりの力で魔法を解いた。もっとも、生きながらえるのに、白い小鳩の教えてくれた「牛乳と白パン」、「衣装」は利用したが。

王子の父親の王様については、彼はある王様の息子でした (er war eines Königs Sohn,)とあるように、王様という言葉が登場するだけである。母親のお后様については言葉すら出てこない。

魔法を解いて王子を救い出した下女は結婚相手の王子にどのような感情を抱いていたのであ

ろうか。このことについては一切語られていないので、分らない。これに対し、魔法から解放され、元の人間の姿に帰ることができた王子は下女をどう思っているのだろうか。男の人は彼女を抱きしめ、心をこめて口づけをした（, der es umfaßte und herzlich küßte）とあるので、王子は下女に好感を持っているのであろう。しかしそれは、下女が木と鳩にされていた自分を魔法から解放し、人間の姿に戻してくれたことへの感謝と喜びの表現でもあろう。この後すぐに結婚したことを考慮に入れても、後者の可能性の方が大であらう。いずれにせよ、王子の感情も、愛情とか恋愛とかといった、相手に強く引かれた感情ではない。

このメルヘンでは魔法の魔法を解くということが主な内容、話の筋となっており、王子と下女の結婚は、魔法を解いた行為の結果であり、付け足しである。

2 番目は『森の家 (Das Waldhaus)』(KHM 169) である。

貧乏なきこりが妻と娘三人と一緒に森のはずれの小屋で暮らしていた。

ある日、きこりが仕事をしに森に行った後、長女がお昼の弁当 (Mittagsbrot)(Suppe) を持って出かけて行った。娘は道に迷い、夜になってしまった。木の間から灯りが見えたので、娘がその方に行くと、家が一軒あった。娘が中に入ると、氷のような白髪の老人 (ein alter eisgrauer Mann) が食卓に座っていた。娘は一晩泊めてもらうことにした。老人は娘に夕食を作ってくれ、と言った。娘は夕食を作ると、一人で食べ、おなかが一杯になると、寝てしまった。老人は娘を地下室へ閉じ込めた。

今度は次女が弁当を持って出かけて行った。次女も森に迷い、老人の家に行き、姉と同じ行動を取ったので、地下室に閉じ込められた。

最後は末の娘がお弁当を持って森へ出かけて行った。末の娘も森に迷い、老人の家に来て来た。末の娘も老人に言われて、立派なスープをこしらえたが、食べる前に外の鶏や牛に食べ物と水をやり、それから食卓について、老人の食べ残しを食べた。そして老人が寝るのを待って、お祈りをして、寝た。

朝目を覚ますと、老人の家は王様の宮殿 (ein königlicher Palast) になっていた。そして老人は若く美しい (jung und schön) 男性になり、雌鶏と雄鶏と牝牛は召使 (Diener) になっていた。そしてその男性は「私は王子ですが、悪い魔法に魔法をかけられ、氷のような白髪の老人になって、森の中で暮らすはめになったのです。雌鶏と雄鶏とまだらの牝牛の姿にされた三人の召使以外に、誰も私の側にいることは許されませんでした。そして人間だけでなく動物達にも親切な、心の善良な娘が来るまでは、この魔法は解けないことになっていたのです。それがあなただったのです。今日の真夜中頃に私達はあなたによって (魔法から) 救い出されました。そして古い森の家もまた私の王宮に戻りました。ich bin ein Königssohn und war von einer bösen Hexe verwünscht worden, als ein alter eisgrauer Mann in dem Wald zu leben: niemand durfte um mich sein als meine drei Diener in der Gestalt eines Hühnchens, eines Hähnchens und einer bunten Kuh. Und nicht eher sollte die Verwünschung aufhören, als bis ein Mädchen zu uns käme, so gut von Herzen, daß es nicht gegen die Menschen allein, sondern auch gegen die Tiere sich liebevoll bezeugte, und das bist du gewesen, und heute um Mitternacht sind wir durch dich erlöst und das alte Waldhaus ist wieder in meinen königlichen Palast verwandelt worden。」と言った。それから王子は三人の召使に、娘のお父さんとお母さんをご婚礼の祝宴にお連れするように言った。姉二人は心を入れ替えるまで、炭焼きのところで (bei einem Köhler) 下女奉公をさせられることになった。

このように、王子と末の娘の結婚は魔法からの解放結婚である。この場合、魔法を解くには善良な心がありさえすればいい。異次元の世界からの援助はまったく必要ない。このメルヘンは、いわばきこりの末娘と魔法の、善と悪の戦いのメルヘンである。

魔法を解いてもらって、白髪の老人から若い元の姿に戻してもらった王子は、恩人の末娘に対して、どのような感情を抱いていたのか、叙述がないので分らない。最後の台詞にも、恩人に対する感謝の言葉はない。解放されたことの喜びも、娘さんに対する感情も表さず、ただ単に結婚のことだけを述べる。末の娘も王子にどのような感情を抱いていたのか分らない。

『森の家』では、善人は報われ、悪人は罰せられるということが主な内容となっており、善人はどのような振る舞いをすべきかが語られる。それゆえ、善行から結果した、王子と末の娘の魔法からの解放結婚は、メルヘン全体の中で、重要な役割を果たしていない。むしろ、その役割は極めて小さい。結婚は、善人は救われるという、報いの象徴に過ぎない。話の付け足しに過ぎなかった『森の中の老婆』の下女と王子の魔法からの解放結婚の方がまだしも大きな役割を演じている。

第3節 類型3の魔法からの解放結婚

最初は『黄金の山の王様 (Der König vom goldenen Berg)』(KHM 92) である。

むかし、まだ小さい男の子と女の子のいる商人がいた。商人の船が沈没し、商人は突然貧乏になった。商人は不幸を少しでも紛らわせようと、畑に出て、あっちこっち行ったり来たりしていた。すると突然黒い小さな小人 (ein kleines schwarzes Männchen) が現れた。小人は「お前が家に帰って最初に脚にぶつかるものを十二年後にこの場所へ持ってくることをわしに約束するならば、お前に欲しいだけお金をやる。wenn du mir versprichst, das, was dir zu Haus am ersten widers Bein stößt, in zwölf Jahren hierher auf den Platz zu bringen, sollst du Geld haben, soviel du willst.」と言った。商人はそれは犬以外にありえないと思い、証文に捺印をして (Handschrift und Siegel darüber)、小人に渡し、家に帰った。家に帰ると、小さい男の子が喜んでやってきて、脚をつかまえた。一ヵ月後屋根裏に行くと、お金が山のようにあった。

十二年後、父と若い息子は畑に出かけて行き、輪を描いて、その中に入って、待っていた。すると、黒い小人がやって来た。小人と、息子を出せ、出さぬの押し問答があった後、息子を小舟に乗せ、足で蹴って、成り行きに任せることで、話がついた。

若者は流れて行き、どこか見知らぬ岸へ着いた。すると、目の前に美しいお城 (ein schönes Schloß) があった。お城の中に入ると、誰もいなかった。しかし、一番奥の部屋に蛇が一匹いた。それは魔法をかけられた乙女 (eine verwünschte Jungfrau) であった。蛇は若者を見ると、喜んで言った。「いらしてくださったのかしら、私の救い主。あなたをもう十二年もお待ちしておりました。この国は魔法をかけられております。あなたに魔法を解いていただかなければなりません。kommst du, mein Erlöser? auf dich habe ich schon zwölf Jahre gewartet; dies Reich ist verwünscht, und du mußt es erlösen.」そして蛇は、魔法を解く方法を若者に教えた。それは、今晚十二人の黒い男がやって来て、殴ったり突いたりして責めるが、黙ったまま耐えること、次の晩にも別の十二人がやって来る、そして三日目の晩には二十四人がやって来て、若者の首を切るが、一言も口に出してはならない、というものであった。それから、蛇は、あなたを命の水 (das Wasser des Lebens) で生き返らせます、と言った。

若者は、蛇の言った通りのことをした。すると、三日目の晩に、蛇は美しい王女になった

(in der dritten Nacht ward die Schlange zu einer schönen Königstochter)。それから、王女は若者を命の水で生き返らせ、若者の首に抱きつき、口づけをした(dann fiel sie ihm um den Hals und küßte ihn.)。それから結婚式がとり行われ、若者は黄金の山の王様になった。

八年後、王様は嫌がるお后様を説き伏せ、魔法の指輪 (einen Wünschring) をもらって、故郷の父のところへ帰って行った。父親が王様を実の子だと信じないため、魔法の指輪でお后様を呼び寄せた。それは、お后様から固く禁じられていた指輪の使い方であった。それで、お后様は魔法の指輪を持って故郷に帰ってしまった。王様は、しかたなく歩いて王国に帰ることにした。途中巨人が三人 (drei Riesen) 喧嘩をしていた。王様は三人から、声を出すだけで全員的首を切り落とすことのできる剣 (einem Degen) と透明人間になれる外套 (einem Mantel) と望むところはどこへでも行ける一足の長靴 (ein Paar Stiefeln) をうまく騙し取った。そして長靴を履いてあっという間に黄金の山の王国に着いた。ところが、お后様は他の人と結婚の祝宴を開いていた。王様は外套を着て姿を隠し、魔法の剣で全員的首をはねた。そしてまた黄金の山の王様になった。

商人の子は、首をはねられ、殺されることが分っていても、魔法にかけられて蛇にされている王女を救って、王女と結婚したのであるから、商人の子と王女の結婚はまさに魔法からの解放結婚である。

魔法をかけられている王女を救うには、死と恐怖にさらされても黙って耐える覚悟があればよく、異次元の世界の人物も贈物も必要でない。ただ、王女にかけられた魔法を解いた後、王女と結婚するには、命の水で生き返らせてもらうことが必要であった。それは異次元の世界のものである。

魔法を解いてもらって、蛇から人間の姿に戻ることができた王女は、恩人の商人の子に対して、どういう感情を持っていたのであろうか。王女は魔法を解いてもらい、人間になった後で、商人の子を命の水で生き返らせ、彼の首に抱きつき、口づけをした。この行為が、商人の子への好意なのか、感謝なのか、あるいは単なる感激なのか、判断を下すことは難しい。王女が商人の子に口づけをした直後、お城全体に歓声が上がリ、喜びに満ちた (und war Jubel und Freude im ganzen Schloß。) ところを見ると、解放されたことへの喜びの方が強かったのかもかもしれない。ただ、結婚して八年後、王様が故郷へ帰るとき、自分が不幸になることを悟っていたので、結婚生活は幸せだったと言える。しかし、それにもかかわらず、お后様は、また別の人と結婚しようとして、王様に殺されることになった。

では、商人の子は王女をどう思っているのであろうか。この若者の反応は一切語られていないので、彼の王女に対する気持ちは不明である。

第2番目は『大がらす (Die Rabe)』(KHM 93) である。

むかし昔、女王 (eine Königin) がいた。女王にはまだ幼い娘が一人いた。お姫様が行儀が悪いので、女王は、からすになって、どこかへ飛んで行け、と言うと、お姫様は本当に大がらすになり、窓からどこかへ飛んで行ってしまった。

大がらすは暗い森 (einen dunkeln Wald) の中で暮らしていた。ある時、その森へ男の人がやって来た。からすは「私は生まれは王女ですが、呪われているのです。でも、あなたは私を救い出すことができますのです。ich bin eine Königstochter von Geburt und bin verwünscht worden, du aber kannst mich erlösen.」と言って、男に救い出す方法を教えた。しかし、男はからすの言ったことができず、寝てしまった。そこで、からすは、パン (ein Brot) と肉を一

塊（ein Stück Fleisch）とぶどう酒を一本（eine Flasche Wein）を寝ている男の側に置き、名前を彫った黄金の指輪を彼の指にはめ、手紙を一通置いて、飛び去った。手紙には、食べ物と飲み物はいくら飲み食いしてもなくなるらないものです、私を救うお気持ちがございましたら、シュトロームベルクの黄金のお城にお越し下さい、と書いておいた。

男は目を覚ますと、すぐに出発した。そしてある森に入り込んだ。そこで、一人の大きな巨人（ein großer Riese）に出くわした。巨人にパンと肉とぶどう酒をたらふく食べさせると、巨人はご機嫌になり、シュトロームベルクの黄金のお城の近くまで担いで行ってくれた。ところが黄金のお城は、ガラスの山の上に（auf einem gläsernen Berge）立っていて、滑ってどうしても登ることができなかった。ある時、強盗が三人殴り合いの喧嘩をしていた。三人は、扉をさっと開けることのできる杖（einen Stock）、透明人間になれる外套（einen Mantel）、ガラスの山でも登れる馬（ein Pferd）をどう山分けするかで、争っていた。男は、自分の貴重な持ち物と交換してあげようと言って、強盗たちを騙し、杖を持ち、外套を着て、馬に乗ってガラスの山に駆け登った。杖でお城の門を開け、中に入ると、大広間に乙女が座っていた。男は、乙女の前のぶどう酒の入った高脚杯に黄金の指輪を入れた。それを見た乙女は、あの男が来ていることが分った。男は外套を脱ぎ、馬から下りて、お姫様を腕に抱きしめた。お姫様は男に口づけをして言った。「今あなたは私を救い出してくれました。あす私たちの結婚式を挙げましょう。jetzt hast du mich erlöst, und morgen wollen wir unsere Hochzeit feiern.」

このメルヘンでは、珍しいことに、主人公の男は、呪い（魔法）を解くことに三度も失敗する。しかし男は、超能力を発揮する異次元の世界の杖と外套と馬を手に入れ、やっとお姫様を救い出し、結婚する。紆余曲折はあるが、男とお姫様の結婚は魔法からの解放結婚である。

男は、大がらすになっているお姫様を救う最初の試みには失敗したが、この時は、食欲に打ち勝ちさえすれば、お姫様に向けられた呪いを解くことができた。しかし、シュトロームベルクの黄金のお城に行って、お姫様を救い出すには、異界の人物である大きな巨人、そして異界の杖、外套、馬が不可欠であった。さらに、前提として、お姫様からの贈物、パンと肉とぶどう酒も必要であった。男はこれらの超自然的な力を借りることなしには、お姫様を呪い（魔法）から救い出すことはできなかった。

『大がらす』の魔法からの解放結婚においては、お姫様の母親の女王は何の役割も演じていない。最初に自分の娘を呪って、大がらすに仕ただけである。父親は登場しない。

最後のガラス山の黄金のお城で、お姫様を救い出したとき、男はお姫様を腕に抱きしめ、お姫様は男に口づけをした。これから、双方に好意があるようにも受け取れるが、男の方に、およそ人間が解決することが不可能に思えるような困難な事態を乗り越え、お姫様に会えた喜び以上の気持ちがあったかどうか、そしてまたお姫様の方に、もう駄目かと思っていた呪われた状態から解放してくれたことへの感激以上の気持ちがあったかどうか、定かではない。

このメルヘン全体のストーリーは、呪い（魔法）を解くために、男が数々の困難を乗り越え、超自然的、超人間的な不思議な能力を発揮する杖や外套や馬を用いて、お姫様を救い出すことである。男とお姫様の結婚はその結果に過ぎない。決して結婚が目的ではない。

第3番目は『哀れな粉屋の徒弟と子猫（Der arme Müllerbursch und das Kätzchen）』（KHM 106）である。

ある粉屋に年老いた粉屋の主人が住んでいた。粉屋には妻も子供もなく、徒弟が三人（drei Müllerburschen）ただけだった。年老いた粉屋は隠居を考え、一番立派な馬（das beste

Pferd) を持ってきた者に粉屋を譲ると言って、三人を旅に出した。

馬鹿にされている一番年下のハンスは、利巧な他の二人に置いてきぼりにされた。独りぼっちになったハンスは、どこへ行ったらいいかわからず、森の中を歩いていた。すると、まだら模様の子猫 (ein kleines buntes Kätzchen) に出くわした。子猫は、七年間私の従僕として仕えるなら、見たこともないような立派な (schön) 馬をあげると言って、魔法をかけられた小さなお城 (ihr verwünschtes Schloßchen) へ連れて行った。お城には猫ばかりいた。ハンスは猫のお城でずっと奉公した。七年目に銀の材木 (Bauholz von Silber) で小さな家 (ein kleines Häuschen) を建てさせられた。子猫がその家を開けると、気品のある (stolz) 馬が十二頭いた。子猫は、私が馬をあなたの家まで届けてあげるから、家にお帰り、と言った。

ハンスが家に帰ると、他の二人はもう家に戻っていた。一人は目の見えない馬を、もう一人はびっこの馬を連れて帰っていた。二人は、ハンスに馬はどこだと尋ね、ハンスが後からやって来る、と答えると、馬鹿にして笑った。

三日後の朝、目が覚めると、六頭だちの馬車がやってきて、馬車からまだら模様の子猫だった王女が華やかな衣装を身につけ、おりてきた。そして王女は、七頭目の馬をこれはハンスのものだと言って、渡した。その立派な馬を見て、粉屋はハンスが粉屋の跡継ぎだと言ったが、王女はハンスを馬車に乗せて連れて行った。小さなお城に着くと、ハンスが建てた小さな家は大きなお城に変わっていた。そこで王女はハンスと結婚した。こうしてハンスは生涯お金持ちになった。

ハンスと王女の結婚は、魔法にかけられ、子猫にされていた王女を人間の姿に戻して結婚したのであるから、魔法からの解放結婚である。

魔法を解いて、子猫を元の王女の姿に戻すには、子猫の従僕になって七年間まじめに働けばよい。異次元の世界のものは何も必要ない。ハンスの父母も、王女の父母の王様やお后様もまったく登場しない。名前さえ出てこない。

魔法を解き、子猫を人間の姿に戻してやって、王女をもらうことになったハンスは、結婚相手の王女に対して何の反応も示していない。結婚したいのかどうかも分らない。ハンスは、無感情、無人格の人形のように、馬車に乗せられ、お城へと連れて行かれる。そして結婚することになる。しかし「そこで王女はハンスと結婚しました (da hat sie ihn geheiratet.)」とあるように、結婚の主導権はあくまで王女にある。ハンスは単なる目的語で、意思や感情、人格はない。王女も、自分を解放してくれたハンスに対し、感謝の気持ちも、喜びも、愛情も、まったく持ち合わせていないかのように、淡々と事を進める。馬鹿なハンスを婿にもらってやり、お金持ちにしてあげると言わんばかりに。

第4番目は『ガラスの棺 (Der gläserne Sarg)』(KHM 163) である。

ある小さな仕立屋の見習い (ein Schneiderbürschchen) が旅に出て、ある大きな森の中に迷い込んだ。木の上で夜を明かそうと、木に登ると、灯りが見えた。灯りの方へ行くと、小さな小屋 (einem kleinen Häuschen) があった。戸を叩くと、中から、斑色の雑巾みたいなぼろの服を着た、氷のような白髪の年老いた小人 (ein altes eisgraues Männchen, das ein von buntfarbigen Lappen zusammengesetztes Kleid anhatte.) が出てきた。仕立屋が宿を頼むと、小人は最初断ったが、必死で頼むと、親切に泊めてくれた。

朝起きると、騒々しいので、仕立屋が外に出てみると、大きな黒い雄牛と美しい牡鹿 (einen großen schwarzen Stier und einen schönen Hirsch) が闘っていた。牡鹿は角で雄牛を突き刺し、

息の根を止めた。牡鹿は仕立屋さんも角で突いた。それから、牡鹿は気を失った仕立屋を岩壁の前（vor einer Felsenwand）まで連れて行き、そこで仕立屋を下ろした。牡鹿が角で岩の扉を勢いよく突くと、扉が開き、火炎（Feuerflammen）が噴出し、鹿の姿が消えた。そして岩の中から、怖がらないでお入り、という声をした。中へ入り、石を踏むと、石は下へ降りていった。そこには大広間があり、ガラスの箱（den Glaskasten）が置いてあった。その中には、この上もなく美しい娘（ein Mädchen von größter Schönheit）が眠っていた。仕立屋が胸をどきどきさせながら見ていると、娘が突然目を覚まし、あなたがこのガラスの棺の門を抜いて下されば、私は救い出されるのです（wenn du den Riegel an diesem gläsernen Sarg wegschiebst, so bin ich erlöst.）、と言った。仕立屋がそうすると、娘がガラスの棺から出て来て、仕立屋に親愛の情を込めた口づけ（einen freundlichen Kuß）をして、身の上話を始めた。娘はある金持ちの伯爵の子（eines reichen Grafen）で、ある時見知らぬ男がやってきて、宿を頼んだ。その男は娘に求婚したが、娘はその男が魔法（Zauberkünste, Zauberkräfte）を使う男だったので反感を抱き、まったく口をきかなかった。すると、男は怒って、娘の高慢さ（Hochmut）を罰してやると言った。翌朝、その魔法使い（Der Schwarzkünstler）は兄を牡鹿にして出て行った。娘は拳銃で魔法使いを撃ったが、弾は跳ね返り、馬の頭に当たった。魔法使いが二言三言つぶやくと、娘は気を失った。気がつくと、こうして地下の洞窟の中のガラスの棺の中に（in einem gläsernen Sarge）いた、ということであった。雄牛になっていた魔法使い（den Zauberer）を殺した兄も人間の姿に戻って、森から帰ってきた。そしてお姫様は仕立屋と結婚した。

このように、仕立屋は、地下の洞窟の中のガラスの棺の門を抜いて、魔法を解き、お姫様を救い出して、結婚したので、二人の結婚は魔法からの解放結婚である。

魔法を解くには、地下の洞窟の中にあるガラスの棺の門を抜きさえすればいい。しかし、地の底に通じる岩壁の所へ行くには、異次元の世界の牡鹿の導きが必要であり、ガラスの棺にたどり着くには、異次元の世界のものと思われる、得体の知れない力を持った（von einer heimlichen Gewalt）姿なき声が必要であった。

仕立屋の両親も、お姫様の両親も登場しない。お姫様の父親の伯爵も母親も、お姫様が非常に幼いころになくなっている。

仕立屋は魔法を解いたが、人が言う通りにしただけである。入れと言われて、鉄の扉から入り、石を踏めと言われて、石を踏み、ガラスの箱を見ろといわれて、ガラスの箱を見、娘にガラスの棺（箱）の門を抜いてと言われて抜き、お姫様に呼び寄せられて、口づけをされ、お姫様に祭壇の側で手を差し伸べられて、結婚した、という具合である。このように、仕立屋は、魔法を解くという困難なことをやり遂げてはいるが、終始受動的である。仕立屋は、ガラスの棺に眠るこの上もなく美しい娘を、胸をどきどきさせながら見ていたので、娘に強く惹かれていることはよく分る。しかし、このメルヘンのどこからも、彼にお姫様と結婚したいという思いがあると読み取ることにはできない。もっとも、庶民の仕立屋にとって、お姫様と結婚できるということはこの上ない幸せではある。

魔法を解いて救い出してもらったお姫様は、他の魔法からの解放結婚の話と違い、口づけは口づけでも「親愛の情を込めた口づけ」をしているので、仕立屋に好感を抱いているのは確かであろう。しかし、このお姫様は生涯独身であることを誓っていた（daß wir beide den Entschluß faßten, uns niemals zu verheiraten.）のに結婚することになったこと、そして「慈悲深い神様が私をあなたに巡り合わせ、私の苦しみを終止符を打って下さったのです。…貴方は

神様（天）がお定めになった私の夫です。あなたは私の愛に包まれ、あらゆる地上のお宝に囲まれ、喜びを妨げられることなく、生涯をお過ごしになる定めなのです。der gütige Himmel hat mich zu dir geführt und meinen Leiden ein Ziel gesetzt. ...Du bist der vom Himmel bestimmte Gemahl, und sollst, von mir geliebt und mit allen irdischen Gütern überhäuft, in ungestörter Freud dein Leben zubringen.」と言っていることを考えると、お姫様は、苦しみから私を救って下さったのはあなたですが、そのように導いたのは神様です、そしてあなたと結婚することは神様の思し召しなのです、というような、世俗的な愛情とは少し異なる、宗教的な悟りの境地にいるようである。

お姫様と仕立屋の結婚は、不思議な事件の連続である魔法からの解放の物語からこぼれ落ちた果実である。

第5番目は『太鼓たたき (Der Trommler)』(KHM 193) である。

ある晩、若い太鼓たたきがたった一人で野原を歩いていて、湖のほとりにやって来た。そして岸边に三枚の白い亜麻の布 (drei Stückchen weiße Leinwand) が置いてあるのを見つけた。太鼓たたきは、それが余りにも上等だったので、一枚ポケットの中に入れて、家に帰った。夜寝ようとする、どこからか、私の羽衣 (肌着 Hemdchen) を返して下さい、という声が出た。その声の主は、強力な王様のお姫様 (die Tochter eines mächtigen Königs) で、ある魔女の魔力 (die Gewalt einer Hexe) で、ガラスの山に (auf den Glasberg) 封じ込まれており、毎日湖で水浴びをしに来ているが、衣がなければ帰れない、と身の上話をした。そこで、太鼓たたきは衣を返してやった。

夜が明けると、太鼓たたきはお姫様を救うために旅に出た。森に入り、人食い (Menschenfresser) の巨人 (ein Riese) を騙して脅し、ガラスの山に連れて行かせた。しかし、ガラスの山はつるつる滑り、登ることができなかった。太鼓たたきが途方に暮れていると、それほど遠くないところで、二人の男が鞍のことで (wegen eines Sattels) 喧嘩をしていた。それはただの鞍ではなく、その鞍にまたがれば、望むところは瞬時にどこへでも行ける不思議な鞍であった。太鼓たたきは喧嘩を調停してやると言って、二人を騙して、鞍を取り上げ、それに乗ってガラスの山の頂上に着いた。山の上には古い石の家が一軒 (ein altes steinernes Haus) あった。扉を叩くと、赤い目の褐色の顔をした老婆 (eine Alte mit braunem Gesicht und roten Augen) が扉を開けた。老婆は長い鼻に眼鏡をかけて、太鼓たたきを鋭い目つきでじっと見て (sie hatte eine Brille auf ihrer langen Nase und sah ihn scharf an,)、用は何かと尋ねた。太鼓たたきが宿と食事を頼むと、老婆はまず仕事を三つやってからだと言った。

一つは、夜までに、指ぬき (Fingerhut) で池の水をかえ、魚の種類と大きさを分けて並べることであった。太鼓たたきが、それは無理だと思い、仕事を止めて休んでいると、家から驚くほど美しい (wunderschön) 娘が出てきて、太鼓たたきを寝かせ、寝ている間に、魔法の指輪 (einen Wunschring) で、あっという間に仕事を仕上げた。目を覚ました太鼓たたきはびっくりした。娘は、種類の違う一匹の魚は、老婆に「これはお前にやる、おいほれの魔女め。der soll für dich sein, alte Hexe.」と言って、顔をめがけて投げつけなさいと言った。太鼓たたきがそうすると、老婆は陰険な目つき (mit boshafte Augen) で睨んだ。二つ目は、夜までに、鉛の斧、ブリキの槌と楔で森の木を全部切り倒し、薪にして、およそ三立方メートル位の小さな山に積み上げることであった。今度も娘が、太鼓たたきが寝ている間に、魔法の指輪で、仕事を片付けてくれた。そして娘は、残った枝で「これはお前の分だ、この魔女め。

der soll für dich sein, du Hexe.」と言って、老婆を殴りなさいと言った。太鼓たたきがそうすると、老婆はあざ笑って、明日の朝早く薪の小山を一山にし、全部燃やせ、と言った。今度も娘が全部やってくれた。そして娘は、魔女（die Hexe）が来たら、言われることは全部怖がらずにして下さい、怖がればあなたは焼け死にます、最後に魔女を捕まえて火の中に放り込みなさい、と言った。娘がいなくなると、魔女が忍び寄り、太鼓たたきに、炎の中に入って行って、燃えない割り木（ein Klotz）が一本あるからそれを取って来い、と言った。太鼓たたきが炎の中に入り、それを取って来て、地面に置くと、それはあの美しい娘になった。娘は、彼に代わって、魔法の指輪で、難題を解決してくれた人であり、また探していたお姫様でもあった。魔女が娘をさらって行こうとしたので、太鼓たたきは魔女を捕まえ、火の山に放り込んだ。お姫様は「あなたは勇敢にも私のためにすべてを投げ打ってやってくれました。でも、私もあなたのために何でも致します。あなたが私に操を立てると約束して下さいれば、あなたを私の夫と致します。du hast alles für mich gewagt, aber ich will auch für dich alles tun. Versprichst du mir deine Treue, so sollst du mein Gemahl werden.」と言った。

二人は魔女が集めていた宝石を取り、魔法の指輪をくると回し、ガラスの山を降りた。太鼓たたきは結婚する前に両親に会ってくると言って、故郷へ帰った。そして太鼓たたきが両親の右の頬（die rechte Wange）に口づけをすると、太鼓たたきはお姫様のことをすっかり忘れてしまった。それから、父親は宝石で豪華なお城を立てた。そして母親は太鼓たたきのお嫁さんをさがし、三日後に結婚ということになった。

明日が結婚式という日に、お姫様がやって来て、魔法の指輪で出した、お日様のように輝く美しい衣装（das schöne Kleid）をお嫁さんに差し上げ、その代わりに、お婿さんの部屋の外にはべらせてもらった。お姫様は、ガラスの山や魔女のことを必死で訴えたが、太鼓たたきは眠り薬（einen Schlaftrunk）の入った寝酒（Nachtwein）を飲まされていたので、聞く耳を持たなかった。今度は、お姫様は、お月様のように美しい衣装をお嫁さんに差し上げて、また部屋の外にはべらせてもらい、訴えたが、無駄であった。三日目の夜には、お姫様は、お星様のように輝く衣装をお嫁さんに差し上げ、部屋の外にはべらせてもらった。今度は太鼓たたきは眠り薬の入ったぶどう酒を飲まなかった。太鼓たたきはお姫様の訴えを聞き、飛び起きて、お姫様の手を取り、両親のところへ行き、「この人が私の本当の花嫁です。Das ist meine rechte Braut.」と言った。ことのいきさつを聞いた両親も納得し、正式の結婚式が挙げられた。

太鼓たたきとお姫様の結婚は、魔女の魔力でガラスの山に封じ込められていたお姫様を太鼓たたきが救い出して結婚したのであるから、魔法からの解放結婚である。

『太鼓たたき』では、お姫様を魔法から解放することは困難極まりない。まず、異次元の世界の者と思われる人食いの巨人をうまく騙して脅し、ガラスの山を教えてもらった上に、そこへ連れて行ってもらう。次に、喧嘩をしている男二人から、魔法の鞍を騙し取り、ガラスの山に登る。それから、魔女が出した三つの難題、池のかえぼり、森の木をすべて薪にすること、薪の巨大な山をすべて燃やすことを、それぞれ一日でやり遂げなければならない。これら三つの難題は、お姫様が、魔法の指輪で、太鼓たたきが寝ている間に、すべて解決してくれた。最後は、巨大な炎の山の中に入り、燃えない割り木を一本持ってきて、その代わりに、魔女をその炎の山の中に放り込むことである。これは太鼓たたきが独力でやり遂げる。ただし、怖がらなければ焼死することはないことになっていた。このように、魔法を解いてお姫様を救出するには、異界からの人物と贈物が不可欠であった。

この面では、難題解決結婚と共通する。しかし、難題解決結婚であれば、普通難題を解決した時点で結婚となる。魔法からの解放結婚では、何らかの魔法を解く行為が必要である。この話では、それは炎の中から割り木を取ってくることである。それがあって初めて、お姫様が元の人間の姿に戻るのである。人間の姿に戻らなければ結婚はできない。魔法からの解放結婚すべてで、人間が動物や物に変えられているわけではないが、この点が難題解決結婚と違うところである。もう少し一般化して言えば、魔法からの解放結婚では、魔法を解き、結婚相手を解放しなければ、結婚へといたることはない。

さらに、魔法からの解放結婚の本質の一つは、お姫様の次の言葉によく表れている。「あなたは勇敢にも私のためにすべてを投げ打ってやってくれました。でも、私もあなたのために何でも致します。あなたが私に操を立てると約束して下さい、あなたを私の夫と致します。」つまり、魔法からの解放結婚は、魔法をかけられ、ガラスの山に閉じ込められ、割り木にされた、どうしようもない苦境から「すべてを投げ打って」救ってくれた行為への感謝の印でもある。難題解決結婚との違いは、この感謝の気持ちにある。感謝は、魔法から解放された本人自身が表明する。だから、魔法からの解放結婚では、親ではなく、本人が結婚を決意し、結婚に踏み切る。難題解決結婚の場合は、親（ほとんどが父王）が難題解決の褒美として、自分の子（ほとんどがお姫様）を勝手に嫁（あるいは婿）にやる。

太鼓たたきは、お姫様から求婚されたとき、ほとんど反応を示さなかった。お姫様のことが嫌いだとは到底思えないが、好意があるとも思えない。最後に、太鼓たたきは「本当の花嫁」に気づき、母親が世話をしたお嫁さんとの結婚を断るが、この事実だけから、お嫁さんよりもお姫様の方を愛していたと判断することはできない。というのも、その時、太鼓たたきは「どうしてぼくはこんなにも不誠実な行為をとることができたのだろう。wie habe ich so treulos handeln können.」と言っているからである。つまり、太鼓たたきにとっては、愛情と言うよりも、誠実さ、操を立てることが大事なのである。

お姫様の場合は、太鼓たたきに好感は持っているが、それよりも命を投げ出して魔法から救ってくれた命の恩人を重んずる気持ちの方が強いであろう。「その後、お姫様は太鼓たたきをじっと見た、そしてその人が美しい若者であることがわかり、また彼が自分を救うために命を投げ出してくれたことを考えて Die Königstochter blickte darauf den Trommler an, und als sie sah, daß es ein schöner Jüngling war, und bedachte, daß er sein Leben daran gesetzt hatte, um sie zu erlösen,」、お姫様は太鼓たたきに手を差し伸べて求婚した、という事実がそのことを裏付けている。

太鼓たたきの母親は、太鼓たたきの結婚相手を勝手に探し、結婚させようとしている点では、家父長的だと言えないこともない。しかし、最後に、太鼓たたきの両親は、息子の言い訳を聞き、自分の世話をしたお嫁さんとの結婚をさっとあきらめ、息子が本当の花嫁と結婚することを認める。この点では、現代の普通の両親とそれほど違わない。

『太鼓たたき』は、二つの話から成り立っている。前半が魔法からの解放結婚の話であり、後半は本当の花嫁に気づかせる話である。

第6番目は『水晶の玉 (Die Kristallkugel)』(KHM 197) である。

むかし昔、魔法使いの女 (eine Zauberin) があった。女には三人の息子がいたが、自分の力を奪われないように、長男を鷲 (Adler) に、次男を鯨 (Walfisch) にした。彼らは一日に二時間しか人間の姿に戻るができなかった。

三男はそれを恐れ、逃げ出した。末っ子は、黄金の太陽のお城に魔法をかけられた王女がいて、救いを待ち焦がれていること、しかし、それは命がけの仕事で、すでに二十三人もの若者が非業の死を遂げており、王女を救出できる者はあと一人だけで、それ以後は誰もそこに行くことができない、ということを知っていた。(Er hatte aber gehört, daß auf dem Schloß der goldenen Sonne eine verwünschte Königstochter saß, die auf Erlösung harrte: es mußte aber jeder sein Leben daran wagen, schon dreiundzwanzig Jünglinge wären eines jämmerlichen Todes gestorben und nur noch einer übrig, dann dürfte keiner mehr kommen.) 末っ子は、怖いもの知らずで、そこへ行く決心をした。しかし、お城がどこにあるかわらず、ある大きな森に入り込んでしまった。その森の中で、末っ子は喧嘩をしている巨人から、どこへでも行きたいところへ行ける魔法の帽子 (ein Wunschhut) を騙し取った。それをかぶって、お城へ行きたいと言うと、たちまちお城の門の前に行き着いた。

末っ子がお城の一番奥の部屋に行くと、物悲しい目をし、赤い髪の毛の、しわだらけで灰色の顔をしたお姫様がいた。(sie hatte ein aschgraues Gesicht voll Runzeln, trübe Augen und rote Haare.) 三男は王女から魔法を打ち破る方法を聞いた。それは、水晶の玉を手に入れ、それを魔法使い (Zauberer) の前に差し出すことであった。末っ子は泉のそばへ行き、野牛 (Auerchse) を殺した。すると、野牛の中から火の鳥 (Feuervogel) が逃げ出した。その時、鷲が舞い降りてきて、鳥をくちばしで突いたので、火の鳥は卵を落とした。卵が海岸の漁師の小屋に落ち、燃え上がりかけたとき、鯨が海の水を持ち上げ、火を消した。それで、溶け出す前の卵から、末っ子はうまく水晶の玉を取り出すことができた。末っ子が水晶の玉を持って、魔法使いの前に差し出すと、魔法使いは「わしの魔法の力は打ち破られた。これから先はお前が黄金の太陽のお城の王様だ。meine Macht ist zerstört, und du bist von nun an der König vom Schloß der goldenen Sonne.」と言った。兄たちも人間の姿に戻った。王女も光り輝く美しい乙女になっていた。二人は喜びに満ち溢れ、お互いに指輪を交わした。(beide wechselten voll Freude ihre Ringe miteinander.)

末っ子が水晶の玉を魔法使いの前に差し出し、魔法の力を打ち破り、王女を魔法から解き放ち、王女と結婚したのであるから、二人の結婚は魔法からの解放結婚である。

魔法をかけられている王女を救うには、まず黄金の太陽のお城へ行かなければならない。それには、異次元の世界の魔法の帽子がどうしても必要であった。そして、魔法を解くには水晶の玉が必要であった。水晶の玉を取るには、野牛と戦い、そのお腹の中にある火の鳥の卵を取り出さなければならない。それも燃え尽きないうちに卵の中の水晶の玉を取り出さなければならない。それには、異次元の世界の存在となった兄たちの鷲と鯨の援助が必要であった。このように、魔法を解いて王女と結婚するには、異界の存在とそこからの贈物の力を借りなければならなかった。

末っ子には魔法使いの母親がいるが、それが登場するのは最初だけで、後は登場しない。王女には父も母もないのか、まったく登場しない。父と母と言う言葉さえ出てこない。

魔法から救い出された王女は、「世界中で評判の美しさ, deren Schönheit alle Welt rühmt」、*「世界で最も美しい乙女 das Abbild der schönsten Jungfrau, die auf der Welt war,」*、「光り輝く美しさ in vollem Glanz ihrer Schönheit」と、何度もその美しさが強調されているが、この王女の美しさが、末っ子が魔法を解くために命がけの冒険に挑戦する、その動機となった訳ではない。彼の心臓が怖いものなしだったからである。(Und da sein Herz ohne Furcht war, so

faßte er den Entschluß,) また、王女が「世界で最も美しい乙女」だったので、末っ子が王女に惚れたとも書かれていない。王女の方も末っ子をどう思っているのかよく分らない。最後に王女が魔法を解いてもらい、救出された時、「二人は喜びに満ち溢れ、お互いに指輪を交わした。」とあるので、二人とも一緒になることを喜んでいるのは確かであるが、王女の方は、もう永久に救出されないかと思われた状況から救われたことの喜び、末っ子の方は命をかけた冒険に成功したことの喜びも、そこには含まれているであろう。むしろ、筋の流れからすると、後者の喜びの方が大きいように思われる。それも一つの原因であるが、末っ子と王女の魔法からの解放結婚は、魔法からの解放メルヘンの付け足しの感が強い。

以上の特徴を表にまとめてみると、以下ようになる。

グリム童話													
類型	魔法を解く方法	魔法をかける人	魔法を解く主人公			魔法を解れる人			父王の家父長的態度	結婚生活	魔法を解く際の異界の存在や贈物の話	結婚が主たる話か	
			地位身分	動機	結婚への意志と感情	地位・身分	結婚への意志と感情	容姿と結婚の関係					
1	蜜蜂の女王 62	千粒の真珠を探し、鍵を海中から探し、三人娘の末娘を当てる	王子	不明	殆ど無し	お姫様	無し (魔法を解いたことへの褒美)	無し (不明)	不明 言葉のみ登場	不明	蟻、鴨、蜜蜂の女王	×	
	三羽の小鳥 96	黒い犬を鞭でなぐる	お姫様	兄探しの途中	不明	王子	無し (褒美、行きずり結婚)	無し	無し	不明	老婆、鞭	×	
	命の水 97	お城に入る	王子	命の水を取ってくる	最初は無いが、愛が芽生える	王女	有る	美しい有りそうだが不明	無し 王女の父王非登場	不明	小人、鞭、パン、剣とパン	△	
	怖いもの知らずの王子 121	悪魔の城で折檻に耐え、三晩過ごす階上へ剣を三度振る	王子	冒険	不明	王女	不明	美しい無し	不明 言葉のみ登場 王女の父王非登場	不明	無し	×	
	鉄のストープ 127	ストープから出す	魔女	お姫様	道に迷い、家に帰りたい一心	最初は無いが、愛が芽生える	王子	有る 愛情でなく、誠実さ	美しい有る	無し	幸福	無し	○
2	森の中の老婆 123	指輪を持って来る	魔女	下女	頼まれて	不明	王子	有る 愛情よりも解放の喜び	美しい無し	不明 言葉のみ登場	幸福	無し	×
	森の家 169	善良な娘	魔女	きこりの娘	父に弁当を持って行く	不明	王子	不明	美しい無し	不明 言葉のみ登場	不明	無し	×
3	黄金の山の王様 92	三晩黒い男の責めに耐える	商人の息子	頼まれて	不明	王女	不明	美しい無し	不明 父王は登場せず	不幸	無し (蘇生には命の水)	△	
	大からす 93	食欲に勝つガラス山に行く	女王	男	頼まれて	不明	お姫様	有る 愛情よりも解放の喜び	無し 不明	不明 (女王) 父王は登場せず	不明	巨人、杖、外套、馬、パン、肉、ぶどう酒	×
	哀れな粉屋の徒弟と子猫 106	七年の奉公	粉屋の徒弟	馬欲しき	無し	王女	有る 感謝、喜び、愛情などない	無し 不明	不明 登場せず	不明	無し	×	
	ガラスの棺 163	ガラスの棺の門を抜く	魔法使い	仕立屋の見習	牡鹿に運ばれ、頼まれ	無し	お姫様	有る 好感と宗教的使命感	美しい無し	不明 登場せず	不明	牡鹿声	×
	太鼓たたき 193	火の山の割り木を取り、魔女を焼き殺す	魔女	太鼓たたき	同情心 冒険心	有るが、愛というより誠実さ、操をたてる	お姫様	有る 感謝の気持ちから愛情へ	美しい 余り関係ない	無し 父王は言葉のみ登場	不明	巨人、馬の鞍、魔法の指輪	△
水晶の玉 197	水晶の玉を魔法使いに差し出す	男魔法使い	女魔法使いの三男	冒険心	有るが、お姫様を解放した喜びが強い	王女	有る 解放された喜びが強い	美しい 余り関係ない	不明 父王は登場せず	不明	魔法の帽子、水晶の玉、驚、鯨	×	

第2章 グリム童話の魔法からの解放結婚の特徴

まず第1に、魔法からの解放結婚の最大の特徴は、その名も示すとおり、魔法をかけられたり、呪われたりして、変身させられた人、もしくは幽閉されている人が、ある人によって解放され、その解放してくれた人と結婚することである。この点で、魔法からの解放結婚は、魔法と無関係な苦境や窮地から救い出してもらって結婚する「救出結婚」とは違う。さらに、魔法からの解放結婚の話では、魔法を解く際に主人公が数々の難題に挑むことがよくあるが、だからといって、それが「難題解決結婚」であると言うことはできない。なぜならば、「難題解決結婚」では魔法を解くことがないからである。もちろん、難題と違って比較的簡単な課題（謎解きなど）を解いて結婚するような「課題成就結婚」、「条件結婚」とも違う。また、魔法からの解放結婚には、解放された人びとに解放してもらったことへの感謝、お礼の気持ち、喜びがあることが多いが、同じくこの魔法という点で、それは、難病、奇病などを治してもらったお礼に娘を嫁にやる「お礼結婚」とも違う。

魔法からの解放結婚の第2番目の特徴は、ある人が魔法を解き、ある人が魔法を解かれて、結婚するが、その二人が結びつく根拠、理由が明らかでないことである。一見したところ、当事者同士が結婚する必然性、必要性はない。

例えば『三羽の小鳥』では、3人姉妹の長女が王様と結婚する、王様との間にできた子ども3人は子のない妹2人によって川に投げ捨てられる、3人は運良く漁師に拾われ育てられる、大きくなった兄2人はまだ見ぬ実の父を捜しに出かける、最後に妹が父親探しの旅に出る、妹は川岸で出くわした老婆の言うとおりに黒い犬の顔を鞭で殴る、すると犬は美しい王子になる、父親は見つからず妹は兄2人と（王子も）一緒に家に帰る、後に3人兄妹は王様の子どもであることがわかりお城へ連れて行かれる、犬と猫の子を産んだということで投獄されていたお后様は無実が判明し出獄する、そして悪事を働いたお后様の妹二人は焼き殺される、これでメルヘンは終わり、と思いきや、妹（お姫様）は王子と結婚する。王子はお城までついてきていたのであろうか。王子が魔法を解かれ、犬から人間の姿に戻る出来事は、全体のストーリーからはずれた小さなエピソードに過ぎない。だから、最後の二人の結婚は非常に唐突な印象を与える。『蜜蜂の女王』では、兄二人と違い、魔法を解く意欲もない末の王子に魔法を解く順番が回ってくる、何もできずに泣いていると、恩を感じた動物たちが魔法を解くための3つの難題をすべて解決してくれる、魔法が解ける、眠っていたお姫様は目を覚まし、難題を解くことに失敗し石になっていた兄二人が人間の姿を取り戻す、しかしどこからも誰からも何の喜びも感謝の言葉もない、突如として末っ子の馬鹿太郎は末のお姫様と結婚する。（Und der Dummling vermählte sich mit der jüngsten und liebsten,）このお姫様との結婚は、動物に対しても優しい心根の者は馬鹿者でも幸せになれるということの例示、象徴ではあろうが、動物を虐待しかけた兄二人も姉のお姫様たちをもらうので、それだけでは説明がつかない。非常に不可解な結婚である。また魔法からの解放結婚では、解放される人が美しいと形容されている話は9篇（お姫様が6人、王子が3人）もあるが、『鉄のストーブ』を除き、その美しさに惹かれて結婚に踏み切るわけでもない。

二人が結婚することがなるほどわかるメルヘンは『鉄のストーブ』ただ一つである。このメルヘンでは、王子が「あなたは私のもの、そして私はあなたのもの。あなたが私の花嫁です。私を救い出してくれたのはあなたです。」と言っているように、王子の結婚の動機は魔法から

解放してもらったことである。王子を救い出したお姫様の結婚の動機は王子への恋愛感情である。しかも、お姫様は王子の美しさに惚れる。王子が嫌で嫌でたまらなかったのに、王子の美しさを見たときに、王子に一目惚れする。女性が男性の美しさのみ惚れて結婚を決意するという話はグリム童話でも珍しい。

『命の水』、『大がらす』、『ガラスの棺』、『太鼓たたき』の4篇でも、結婚の理由はわかる。魔法から救い出してもらったことがその理由である。しかし、それは当事者の内の一方だけであり、他方はなぜ結婚に踏み切ったのかはほとんどわからない。『命の水』の王子は、命の水を手に入れたことは喜ぶが、お姫様から結婚の話を持ち出されても、喜ばない。ところが、苦境に陥った1年後、なぜかわからないが、お姫様に恋愛感情を抱いている。だから王子を結婚へと駆り立てたのは恋愛感情であろう。しかし、『大がらす』の男、『ガラスの棺』の仕立屋の見習い、『太鼓たたき』の太鼓たたきがなぜ結婚に応じたのかは不明なままである。

残りの『蜜蜂の女王』、『三羽の小鳥』、『怖いもの知らずの王子』、『森の中の老婆』、『森の家』、『黄金の山の王様』、『哀れな粉屋の徒弟と子猫』、『水晶の玉』の8篇では、結婚することになった当事者2人とも結婚の動機がよくわからない。もっとも、後の5篇は、想像力をたくましくすれば、魔法から解放されたことが結婚することになった理由だろうということはわからないでもない。

第3番目の特徴は、結婚することになった当事者の男女に、愛情とか好意がほとんど見られないということである。

非常に厳密な意味で、結婚の当事者双方に恋愛感情が見られる話はたったの一篇である。『命の水』である。このメルヘンは、魔法からの解放が恋愛へと移行し、一年後に結婚へといたる話である。

他に愛情や好意が若干見られる話は、『鉄のストーブ』、『森の中の老婆』、『大がらす』、『哀れな粉屋の徒弟と子猫』、『ガラスの棺』、『太鼓たたき』、『水晶の玉』である。それらを少し詳しく見てみることにしよう。『鉄のストーブ』では、お姫様は王子が非常に美しい青年であることが分ったときに好きになるが、王子の方は、「あなたは私のもの、そして私はあなたのもの。あなたが私の花嫁です。私を救い出してくれたのはあなたです。」と少し大袈裟な表現で結婚の約束をしているが、王子に、命の恩人への感謝の気持ち、結婚の約束は守るという忠誠心以上の気持ちがあったかどうか、疑問である。『森の中の老婆』では、魔法を解いてもらって救われた王子は、恩人の下女に「心をこめて口づけをし」ているので、彼女に好意を抱いているのであろうが、それは同時に魔法を解いてくれたことへの喜びと心からの感謝の気持ちでもあろう。しかし、下女の方は王子をどう思っているのかはまったく分らない。『大がらす』では、男がお姫様を救い出した時、男はお姫様を腕に抱きしめ、お姫様は男に口づけをする。このことから、双方に好意があるようにも受け取れるが、男の方は、およそ人間が解決することが不可能に見えるような困難な事態を乗り越え、お姫様に会えた喜びの方が強かったであろうし、お姫様の方も、もう駄目かと思っていた呪われた状態から解放されたことへの感激の方が強かったであろう。『哀れな粉屋の徒弟と子猫』では、お姫様には、結婚の意志はあると思われるが、愛情があるかどうかは疑わしい。ところが、お姫様と結婚したハンスは、お姫様という異性に対して、またお姫様との結婚に対して、まったく無反応であり、愛情は全然問題にならない。『ガラスの棺』では、仕立屋がお姫様に惹かれていたのは確かであるが、お姫様の気持ちは、「慈悲深い神様が私をあなたに巡り合わせ、私の苦しみに終止符を打って下さったのです。…あな

たは神様（天）がお定めになった私の夫です。あなたは私の愛に包まれ、あらゆる地上のお宝に囲まれ、喜びを妨げられることなく、生涯をお過ごしになる定めなのです。」という言葉からして、愛情は愛情でも、悟りの境地にある人の宗教的な愛であり、通常の人々の恋愛感情とは程遠い。『太鼓たたき』で、太鼓たたきと結婚したお姫様には、太鼓たたきへの好意と恩人への感謝の気持ちの両方があるが、太鼓たたきは、お姫様の求婚に何の反応も示していないように、お姫様が嫌いなこともないであろうが、お姫様に好意を抱いているとは思われない。『水晶の玉』のお姫様と末っ子も一緒にいることを喜んでいるが、だからといって、それが恋愛感情だとも言えない。お姫様の場合は、絶望的な状態から救われたことへの喜びの方が強いであろうし、末っ子の場合は、命がけの冒険が成功したことへの喜びの方が強いであろう。

第4番目の特徴は、子供が結婚することに関して、親が家父長的な態度をとらないということである。魔法からの解放結婚は全部で13篇あるが、表からも明らかのように、家父長でないメルヘンが5篇、不明のメルヘンが8篇である。ここで不明という言葉を用いたが、その中身はというと、親がぜんぜん登場しないメルヘンが2篇、父（王）とか母とか親とかという言葉のみ登場し、人物が登場しないメルヘンが4篇、親が登場しても何の役割も演じない、いわば登場しないに等しいメルヘンが2篇ということである。だから、不明という分類も、家父長でないメルヘンとして一括りにできる。そうすると、魔法からの解放結婚には、家父長的な態度をとる親は一切登場しないという結論になる。例外はない。結婚に関して父親や母親が何の役割も演じていないし、何の影響力も持っていないのである。むしろ、13篇中8篇で、親の存在そのものが魔法からの解放結婚に不要となっていることの方が注目すべきことである。残りの5篇も、親は登場するが、こと結婚に関しては、親は埒外に置かれている。事実上親は結婚に不必要な存在として描かれている。単に親が家父長的な態度を見せないということにとどまらないのである。

親の態度が家父長かどうかについて、若干の考察を要するのは『太鼓たたき』の母親のみである。他はすべて、考察の必要もない。自明である。それでは、『太鼓たたき』の母親はどのような振る舞いをしているのか、見てみよう。太鼓たたきの母親は、息子に何の相談もせず、勝手に息子のお嫁さんを決めている。これは家父長的な態度であり、現代の風潮からすると、若干違和感があろう。しかし、これは、息子の太鼓たたきが実家に帰った時に、両親の右の頬に口づけをしたために、自分がお姫様と婚約していること、今お姫様との結婚の報告に家に帰っていることをすっかり忘れ、結婚相手ができたことを母親に知らせなかったから起きただけのことである。知らせていれば、母親はそんな勝手なことはしなかったに違いない。現に、太鼓たたきは、両親に何の相談もせず、自分一人でお姫様との結婚を決めたし、母親は、息子がお姫様と婚約していることを後で知ると、お姫様が息子の本当の花嫁であること、そして自分が勝手に決めた結婚相手には息子との結婚を遠慮してもらうことに同意したばかりか、息子の身に起こったことすべてを理解し、息子の結婚を喜んで祝ってやっている。父親も同じように振舞う。否、父親には家父長的なところがまったくない。

このように、親が家父長的な態度を取らない、親は子どもの結婚に何ら関わらない、それどころか親は結婚に不要となっているという点で、魔法からの解放結婚は、父親が登場する限り、例外なく家父長的に振舞う難題解決結婚と極めて対照的である。

では、どうしてそういうことになるのであろうか。魔法からの解放結婚は、文字通り、魔法をかけられたり、呪われて、自由を奪われている主人公が、別の主人公に魔法を解いてもらっ

て取り結ぶ結婚である。したがって、魔法を解いて解放してもらった主人公は、いくつかのメルヘンで、当然のことながら、大喜びをし、魔法を解いてくれた主人公に心より感謝する。すでに、これだけで結婚の理由は、一方の側には、十分にあるとも言える。喜びと感謝の気持ちに溢れ、解放してくれた人と取り結んだ結婚に、話の筋の展開上、親が介入する余地は余りない。しかも難題解決結婚と違い、魔法（難題）を解いたら、親が子どもを嫁にやるとか婿にやるという設定もない。これが考えられる理由の一つである。しかし、それだけでは十分でない。稀ではあるが、喜びや感謝の気持ちを抱きつつも、親が結婚を決めるお礼結婚というものもあるからである。もっと大きな根本的な理由があるはずである。魔法を解くということは、魔法をかけた魔女や魔法使いなどの悪、魔法という邪なる術を用いる邪教、異教などに打ち勝ち、それを滅ぼすということであり、キリスト教からすれば、神の勝利である。したがって、このことは、非常に重みがあり、魔法から救い出された人にとっては、自分を解放してくれた恩人は神の勝利に貢献した人でもあり、たとえ好意を抱いていなくとも、結婚する価値のある人であり、結婚の動機としては十分過ぎるのである。魔法からの解放結婚は、魔女や魔法使い、悪魔に対する神の勝利の象徴、魔女や魔法使い、悪魔の支配から神の支配への転換の象徴となっているのである。『ガラスの棺』がそのことをよく示している。ある晩伯爵の家に見知らぬ男がやってきて宿を頼んだ。娘が泊めてやると、男は娘に結婚を迫った。しかし、娘は男が魔法（Zauberkünste）を使うということを知り、男に強い嫌悪感を抱き、男と一切口をきかなかった。すると、男は腹を立て、意趣返しに、娘の兄を鹿にし、娘をガラスの棺に入れ、洞窟の中に閉じ込めた。この魔法を解き、お姫様を救い出したのが仕立屋であった。救い出された時、お姫様は「慈悲深い神様が私をあなたに巡り合わせ、私の苦しみに終止符を打って下さったのです。…あなたは神様（天）がお定めになった私の夫です。」と言う。これは、魔法をかけられた苦境から救って下さったあなたをお導きになられた（führen）のは神様です、換言すれば、魔法を解き、魔法に打ち勝たれたのは神様です、私たちの結婚もその神様がお決めになられたのです、ということと同じである。実際、魔法を解く上で、仕立屋は何の苦勞もしていない。仕立屋は気を失ったままお姫様が閉じ込められている洞窟へと牡鹿に運んでもらい、後は言われるままに、振る舞っただけである。それも受動的に。まるで、背後から神様に導かれるかのように。したがって、神様がお決めになった、このような結婚に口を差し挟むというようなことは、たとえ父親であってもできない。むしろ、それは積極的に賛成すべきことなのである。父親が家父として家を支配し、いくら威張っていても、その支配の及ぶところはたかだか家の中に過ぎない。これに対し、父親の父でもある神は全宇宙を支配している。神様のなさること、神様が下された結論には、父親もただ賛成する以外にない。否、父親も母親も不要なのである。これが最大の理由であろう。魔法からの解放結婚では、親は家父長的態度をとれないばかりか、不要とならざるをえないのである。

このように考えると、第2番目の特徴である、結婚する当事者にわれわれが納得できるような結婚への十分な動機がないこと、第3番目の特徴である、結婚する当事者間に愛情が余り見られないことの理由も自ずとわかる。魔法を解き、解かれるということは、もうそれだけで結婚の十分な根拠なのであって、その他に別の理由付けは不要だからである。

第5番目の特徴は、魔法から解放された人は、解放を喜んだり、解放してくれた人への感謝の念を抱くということである。例外は『蜜蜂の女王』、『三羽の小鳥』、『哀れな粉屋の徒弟と子猫』の3篇である。お礼結婚にも、喜び、感謝の念、お礼の気持ちがあるが、お礼結婚の場合

にそういう気持ちを抱くのは、難病、奇病、不治の病を治してもらったり、生き返らせてもらった娘の親である。魔法からの解放結婚では、喜んだり、感謝の念を抱いたりするのは、解放された人、その人であって、親ではない。この点がお礼結婚と異なる。

第6番目の特徴は、魔法を解くことは偉大な行為であるはずだが、意外なことに、魔法を解く側に余り強い目的意識がないということである。つまり、魔法を解く者に魔法を解いて救ってやるという意識が余り強くない、ましてや最初から魔法を解いてやるのだという意識を持って行動する主人公はほとんどいないということである。魔法をかけられて困っている人が美しい場合が9篇（お姫様6人、王子3人）もあるが、その美しさに惹かれて、主人公が魔法を解こうとする訳でもない。むしろ魔法を解く過程で、美しさに気付く。

父を探しに行く途中や（『三羽の小鳥』）命の水を取りに行く途中や（『命の水』）父に弁当を持っていく途中に（『森の家』）、ことのついでに魔法を解いたり、道に迷って森に入り込んだり（『鉄のストーブ』、『森の中の老婆』、『大がらす』）、川に流されて魔法をかけられた国へ行き着いたり（『黄金の山の王様』）、知らないうちに魔法をかけられた所に運ばれたり（『ガラスの棺』）した時に、頼まれて魔法を解いたり、難題を解く順番が単に主人公に回ってきて、どうすることもできず、泣いていると、動物たちが魔法を解いてくれたり（『蜜蜂の女王』）、ただ単に馬欲しさに猫に仕えていて魔法を解くことになったり（『哀れな粉屋の徒弟と子猫』）と、こういう具合である。『三羽の小鳥』では、魔法を解いたお姫様には、自分のしていること（老婆の言った通りにすること）が魔法を解いていることだという意識さえない。『命の水』でも王子は魔法を解いているという意識は余りない。瀕死の父王を救う命の水を持って帰るとい意識しかないように見える。事実魔法をかけられている王女は救うが、王子たちは救っていない。『森の中の老婆』の下女も、白い小鳩に頼まれて指輪を持って帰る、その自分の行為が魔法にかけられた王子を救う行為だったとは夢にも思わなかったであろう。『森の家』の娘も自分の心優しい振る舞いがまさか魔法を解くことになるとは想像だにできなかったであろう。『哀れな粉屋の徒弟と子猫』でも、猫に7年も仕えることが魔法を解くことになるとの意識は、粉屋の徒弟にはまったくない。『ガラスの棺』の仕立屋も、次々と聞こえてくる姿なき声にただ従っているだけである。魔法を解いているという意識はない。

動機が魔法を解くことだということが比較的わかりやすい話でも、『怖いもの知らずの王子』では、魔法を解くことが、怖いもの知らずの王子の冒険心を試す絶好の機会でもあり、『水晶の玉』でも、末っ子は怖いもの知らずの心臓を持っており、命がけで魔法を解くことは冒険心を試すことでもある。両者とも魔法をかけられて幽閉されている者を救いたい一心で行動している訳ではない。魔法を解くことだけが動機となっている話は『太鼓たたき』ただ一つである。このメルヘンでは、太鼓たたきが「ich habe Mitleid mit dir, und ich fürchte mich vor nichts.」と言っているように、太鼓たたきは、魔法にかけられたお姫様に同情し、お姫様を救い出そうとしている。もっとも、この場合も、彼には怖いもの知らずの冒険心はある。

第7番目の特徴は、魔法を解くことが意外と簡単だということである。『鉄のストーブ』では、王子を魔法から解放するには、短刀でストーブを削って穴を開けさえすればよい。『森の中の老婆』では、老婆から指輪を奪いさえすればよい。『森の家』では、礼儀正しく、人にも動物にも親切であればいい。『大がらす』では、本来は飲食の誘惑に負けず、その勧めを断りさえすればよかった。『哀れな粉屋の徒弟と子猫』では、7年間という長期ではあるが、猫に仕えさえすればよい。『ガラスの棺』では、ガラスの棺の門を抜きさえすればいい。門を抜き

伯爵の娘を解放したのは仕立屋であるが、実質的に魔法を解いたのは、雄牛（魔法使い）を殺した牡鹿（兄）である。『三羽の小鳥』では、老婆がくれた鞭で黒い犬の顔を殴ればいい。『命の水』でも、小人がくれた鞭とパンの塊を持ってお城の中へ入って行きさえすればいい。

魔法を解くことが困難に見える『太鼓たたき』と『水晶の玉』でも、実際はそれほど困難ではない。前者では、魔法を解くには、燃えさかる薪の山の中に飛び込み、燃えていない割り木を一本取ってこなければならない。しかし、この命懸けの行為も怖がりさえしなければ何ともないのである。後者では、魔法を解く方法は、水晶の玉を手に入れ、魔法使いの前に差し出すことである。その水晶の玉は火の鳥の卵の中にある。それを焼け死なないで取ってくるということは至難の業である。しかし、その仕事の中で最も困難なところは兄の鷲と鯨がやってくれる。主人公の末っ子がしたことといえば、野牛を殺すことと卵から溶けないうちに水晶の玉を取り出すことだけだった。後はそれを魔法使いの前に持って行きさえすれば、魔法は解けたのである。

魔法を解くことが困難極まりない話は『蜜蜂の女王』と『怖いもの知らずの王子』と『黄金の山の王様』の3篇だけである。『蜜蜂の女王』では、魔法を解くには、3つの難題（苔の下の千粒の真珠を一日で探す、鍵を海中から取ってくる、そっくりの三人の姫の中から末の姫を当てる）をやり遂げなければならない。失敗すれば石になってしまう。実際、上の二人の兄は石になってしまった。しかし、末っ子には恩を感じている動物たちがいて、末っ子に代わって難題をすべてやってくれる。末っ子は何もしなくてもよい。『怖いもの知らずの王子』では、魔法を解くには、三晩悪魔の折檻に耐えなければならない。この折檻たるや気絶するほど酷いものである。『黄金の山の王様』でも、魔法を解く方法は、三晩黒い男の折檻に耐えることである。こちらの折檻はもっと酷く、首も切られてしまう。どちらの場合も主人公は命の水で命が救われる。しかし、これらの場合も、困難という意味は、それが命懸けの仕事であるということであって、難題解決結婚の場合のように、地上の人間がやり遂げることが不可能である、という意味の困難さではない。

魔法を解くことがそれほど困難ではないということは、他の側面からも確認できる。異界からの贈物（の考察）である。異界からの贈物は、この地上の人間が解決することが不可能な難題に直面した場合、主人公を助けてあつという間に課題を解決する力も持っている。そのような異界からの贈物を必要としないメルヘンが、魔法からの解放結婚の話では、6話もある。難題解決結婚で、難題を解決するのに例外なく異界からの贈物を必要としたことを想起すると、魔法を解くことがそれほど困難な課題ではないことがわかるであろう。

総じて、魔法からの解放結婚で、魔法を解くのは、異界からの援助や贈物がある場合でも、この世の人間である。例外はない。この点でも、魔法からの解放結婚は難題解決結婚とは違う。難題解決結婚では、難題を解決するのは、ほとんどの場合（13例中9例）、異界の存在であり、主人公は何もしない。

第8番目の特徴は、魔法をかける者は、魔女が4例、魔法使いが2例、女王が1例だが、誰が魔法をかけたかわからないメルヘンも半数近く（6話）あるということである。魔法は忌み嫌われる傾向が強いが、案外誰が魔法をかけたかわからないのである。

第9番目に、魔法からの解放結婚で、結婚する人の身分、地位を考察すると、庶民と庶民の結婚である類型4の結婚がまったくないという際立った特徴が現れる。

魔法からの解放という偉大な行為に対して、お嫁さんやお婿さんにもらう人が庶民であると

いうのでは、余りにも対価が小さいというのがその理由であろう。

第10番目に、魔法を解く人には、いろんな身分や地位の人がいるが、魔法から解放される人は、お姫様か王子しかいない。つまり、身分が最も高い人しかいない。庶民は登場するが、魔法をかけられ、救われて結婚するということはない。これも同じ理由からであろう。

上述したように、魔法をかけられ、苦しめられている人は、お姫様か王子であるが、王子よりもお姫様の方が多い。倍以上である。お姫様が9人で、王子が4人である。これは、女性への偏見と差別のほかに、魔法からの解放への最大の褒美は、王子ではなくお姫様だ（お姫様ならば後に王様という国の最高位につける）ということも理由としてであろう。

第11番目に、類型2の王子と庶民の女性の魔法からの解放結婚では、魔法を解くのはすべて女性で、救い出されるのはすべて王子である。

この理由は容易に理解できる。魔法を解いて救ってもらうのが王子でなく、庶民の女性であれば、救い出して助けてもらったことへの感謝の気持ちから、庶民の娘が王子と結婚してあげるといようなことになり、極めて不自然だからである。

第12番目に、類型3の庶民の男性とお姫様の魔法からの解放結婚は、救い出される人がすべてお姫様で、救う人はすべて男性である。

これは、類型2の逆であるから、理解しやすい。魔法を解いてもらったお姫様が、感謝の気持ちから、あなたのお嫁様になってあげるといことであり、救った庶民の男性からすれば、救ったことへのお礼として、感謝の印として、お姫様をもらい、後には王様になるという最高の出世を成し遂げることができるからである。魔法を解くということは、すでに述べたことであるが、魔女や悪魔に打ち勝つということであり、キリスト教世界では、庶民でさえも、お姫様をもらい、王様になることができるほど偉大な行為だからである。

第13番目の特徴は、魔法からの解放結婚では、結婚そのものがメルヘンの筋全体からすると、付け足しのようにあり、メルヘン全体の中で重要な位置を占めていないということである。13篇中9篇がそうである。はっきりとした例外は『鉄のストーブ』ただ一つである。その理由は、魔法からの解放結婚のメルヘンでは、結婚そのものよりも、魔法をかけられ、悲惨な目にあっているお姫様や王子を、時には命がけで救おうとする、波乱に満ちた、そして往々にして想像を超えた、世にも珍しい行動の連続の方に、話と筋の重点があるからであろう。話の重点は魔法をいかにして解いて救い出すかにあり、結婚はそれから零れ落ちた結果であり、結婚を目的として難局に立ち向かっている訳ではないからである。

最後に、日本には、言霊、呪い（古くは、藁人形、厭魅人形）、呪詛、怨霊、鬼道、陰陽道（まそ呪詛の返し、因縁調伏など）、修験道、狐憑き、犬神など、様々な呪術とその歴史があるが、不思議なことに『日本の昔ばなし』に魔法からの解放結婚は一話もない。魔法という言葉すら出てこない。『日本の昔ばなし』とは較べものにならないほど数多くの昔話を収めている『日本昔話大成』にもない。